

あの日
あの日

平成二十八年熊本地震の記録

熊本県立熊本かがやきの森支援学校



校長室から望む朝日（平成28年4月20日午前6時撮影）

まえがき

「平成28年熊本地震」の発生からやがて1年が経とうとしている今、本書「あの日 あれから」を発刊することとしました。

震源地及びその周辺地域では、復興の歩みが少しずつ始まっているとはいえ、被害が甚大だったこともあり、震災前の日常を取り戻すにはまだまだ長い道程があるような様相を呈しています。また、本校から望むことのできる熊本城の復元には約20年の月日が掛かるとも言われています。

そのような状況もある中で、本校舎は目立った被害も無く、平常の学校生活をほぼ取り戻し、校内には子どもたちの笑顔が溢れています。しかしながら、発災直後から今日に至るまでには、自宅損壊による転居、避難入院、車中泊、避難所生活等々と、辛い生活を強いられた本校の児童生徒及び家族、教職員がいました。

さらに、本校は前震後から臨時避難場所として開設しました。児童生徒及びその保護者には教室棟を開放し、地域住民には体育館、会議室、廊下等を提供しました。ピーク時には約700人の一般避難者（受付名簿上）を受け入れ、本校職員が中心となって避難所運営を行って来ました。

これらの経験を記録に残し、記憶を風化させず、何らかの発信をすることが私たちの役目の一つと考え、本書の発刊に至った次第です。本書は、重度重複障がいのある子ども達とその御家族がどのような体験（思い）をされていたのか、学校はどのように動いてきたのかを中心にまとめました。保護者の方からも寄稿をいただき大変有り難く思っていますが、中には「原稿は書いたけど、なかなか載せることはできない。」と辛い胸の内を語られた方もいらっしゃいます。この発災が、いかにそれまでの平穏な生活を一変させ、それぞれの環境を変えてしまったのかを思い知らされたことでした。

このたびの「熊本地震」の経験から、大規模災害は何処にでも起こり得ることと、避難所指定の有無に関わらず、どの学校であっても災害時には避難所になり得ることを痛感しました。近い過去、我が国では阪神淡路大震災、東日本大震災と2度にわたる大震災が起きています。その教訓から学び、生かされたこともあれば、しっかりと生かすことができていなかった部分もあります。

今後、そのことを検証・見直しし、再び起こるかもしれない災害への備えを怠ることなく、熊本県が目指す『Build Back Better』（創造的復興）を合言葉に復旧・復興へ向けて歩いていく覚悟です。

最後に、関係機関をはじめ、近隣の方々の御支援・御協力、さらには全国からの温かい御支援に対しまして、本紙面にてあらためて感謝とお礼を申し上げます。

平成29年4月

熊本県立熊本かがやきの森支援学校長

五瀬 浩

目次

まえがき

I 熊本地震の記録

1	4. 14－4. 16熊本地震発災	1
	(1) 発災後の児童生徒・職員の状況	
	(2) 避難所になった学校	
2	4. 17以降の学校	6
	(1) 児童生徒の本校への避難状況	
	(2) 避難所運営の経過	
	(3) 避難所運営の方法	
	(4) 避難所運営で工夫したこと	
3	学校再開に向けて	13
	(1) 学校で取り組んだこと	
	(2) 避難所運営の完了	
4	5. 10学校再開	14
	(1) 学校再開の日	
	(2) 簡易給食の実施	

II 熊本地震を振り返る

1	保護者の寄稿	19
2	職員の寄稿	30
3	生徒の作文	44
4	報道関係資料	45

III 熊本地震に学んだこと

1	熊本地震を経て見えてきたこと	49
2	今後の取組として(案)	50
3	寄稿文	
	「災害時の地域連携『熊本地震』における避難所運営をとおして」	54

IV 関係資料

1	写真で見る熊本地震の記録	63
2	日建設計「被害状況調査報告書」	75
3	アンケート結果(抜粋)	87
4	平成29年度の学校防災の取組について(案)(学校生活部)	93

あとがき

I 熊本地震の記録

1 「4. 14-4. 16熊本地震発災」

新しい年度がスタートし、児童生徒が新しい仲間との出会いに胸を膨らませていたちょうどその時期に、熊本地震は起こった。4月14日（木）の学校日誌を見てみると、記事には「今日から小学部1年児童についても給食開始。この2日間で特に大きなトラブルもなく、給食が実施できていることに安堵を覚えた。」と記している。そして、その夜の前震。翌日の15日（金）、学校は臨時休校の措置を取った。とはいえ、建物等の被害は深刻なものではなく、コンクリ土台のわずかなひび割れや隣地から転落してきた墓石等が見られたただけであった。児童生徒・職員、その家族にも特に被害はなく、家屋の損壊等もなかったと確認している。このまま週明けからは学校生活が再開し、児童生徒が元気な笑顔で登校し、いつも通りの楽しい生活が再スタートするものと誰もが疑わなかった。

その思いを打ち砕くかのように、本震が発生。深夜の発災とあって、情報の共有がスムーズにいかなかったところもあったと記憶している。以下は、発災後の状況について、教頭が当時の記録と記憶から掘り起こし、まとめたものである。

(1) 発災後の児童生徒・職員の状況

ア 平成28年4月14日時点での児童生徒・職員の在籍数

児童生徒		64人
本 校	通 学	44人
	寄 宿 舎	0人
	訪 問	6人
分教室		14人
職 員		74人

イ 児童生徒の被災状況

負傷者	0人
自宅ライフライン停止	50人
自宅家屋被害	31人
全半壊（居住不可）	7人
一部損壊（居住可）	24人
自宅・施設の転居	4人
転校を伴う	0人
転校なし	4人
自宅・施設外への避難	42人
親戚等宅	7人
避難所	7人
車中泊	8人
他機関	20人

※自宅：関係機関に入所・入院している幼児児童生徒については保護者等が生活している住宅

※施設：訓練、生活、治療等のため入所・入院している福祉施設や医療機関等

ウ 職員の被災状況（非常勤職員、看護師等を含む）

負傷者	0人
自宅家屋被害	17人
全半壊（居住不可）	1人
一部損壊（居住可）	16人
自宅外への避難	60人
親戚等宅	7人
避難所	17人
車中泊	36人

エ 関係機関の被災状況（児童生徒の入所先等）

関係機関	被災・対応状況
くまもと江津湖療育医療センター	第3病棟がスプリンクラーの誤作動で浸水、第3病棟生は第2病棟に避難して無事
京陵共同調理場	施設被害あり、5/10（火）簡易給食開始までに復旧

（2）避難所になった学校

ア 4月15日までの経過

4月14日（木） 前震発生	21:26	地震発生（震源：熊本地方、M6.5、震度7）
	21:30	校長と教頭が電話で状況確認
	21:40	児童生徒、くまもと江津湖療育医療センター、職員の安否確認開始
	22:50	校長、事務職員が学校に到着 校内被害状況確認
	23:42	くまもと江津湖療育医療センター分教室の児童生徒の無事を確認
4月15日（金） 臨時休校	0:25	校内の被害状況報告（校長→教頭） 児童生徒、職員の無事を確認
	0:30	臨時避難所の開設要請（施設課→事務長）
	6:30	臨時休校の連絡（校長→保護者、職員） 臨時休校の措置と被害状況報告（校長→特別支援教育課） 管理職で週末の当直について検討 一般の避難者0人
	8:30	生徒1家族（益城町在住）が中学部棟に避難 特別支援教育課から約100人分の支援物資（水、毛布、乾パン）が到着
	17:00	教頭が宿直

4月15日の学校日誌には、「地震による被害は深刻なものではなく、コンクリ土台のわずかなひび割れや隣地から転落してきた墓石等が見られたただけだった。」と記してある。医療的ケアの契約のための受診が予定通り行われるなど、その後に本震が起こるなどとは誰もが考えていなかった。



玄関内に設置した案内板及び受付名簿



校内に生じた亀裂



教室の様子



前震で倒れたテレビ

イ 4月16日までの経過

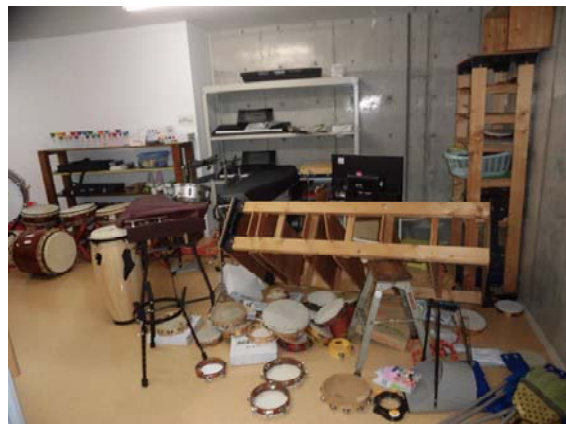
4月16日（土）午前1時25分に本震発生。津波警報が発令されたこともあり、高台にある本校には近隣地域以外からもたくさんの車や避難者が押し寄せた。本震直後は、教頭・事務職員の2人だけで避難者への対応した経緯もあり、学校は想像を絶する状況となっていた。また、避難者への対応をしながら、児童生徒・職員の安否確認を行うことは大変困難であった。個々の職員も被災しており、連絡がうまく取れない状況もあった。全ての職員・児童生徒の安否確認と被害状況の把握が終了したのが、本震発生から10時間近くが経過した午前11時18分であった。

4月16日（土） 本震発生	1:25	地震発生（震源地：熊本地方、M7.3、震度7） 停電 近隣住民が本校に多数避難 教頭と事務職員等で避難者の受け入れ開始 体育館、会議室、管理棟廊下、図書館前ホールを開放 職員で避難所対応 電気復旧
	2:00	動物連れの避難者は管理棟廊下に移動

2:55	「かがやき総務部」のグループLINE作成、児童生徒・職員の安否確認、情報収集
3:00	くまもと江津湖療育医療センターの被害状況確認、第3病棟のスプリンクラー誤作動による浸水で、児童生徒は第2病棟に移動して無事
3:10	災害本部（事務室）にホワイトボードを設置し、児童生徒、職員の安否及び避難状況の記録開始 児童生徒の避難状況に応じて、本校に避難するよう各担任に指示
4:00	生徒1家族が本校に避難
4:18	児童生徒4家族が本校に避難
4:24	訪問教育、安否・避難・被害状況確認完了
5:25	中学部、安否・避難・被害状況確認完了
7:00	特別支援教育課から2回目の支援物資（水、毛布、乾パン）が到着
10:19	分教室、安否・避難・被害状況確認完了 くまもと江津湖療育医療センターは水道・ガス停止
10:30	小学部、安否・避難・被害状況確認完了
11:18	高等部、安否・避難・被害状況確認完了
13:00	生徒1家族が本校に避難
17:00	4/18（月）の臨時休校連絡（校長→保護者、職員） 職員9人で避難者に食事の配給（菓子パン110個） ※校内の避難者数約700人（受付名簿による） 車中泊人数は把握できず
22:00	避難所運営についてのミーティング（総務部） 管理職が宿直



本震で倒れた重戸棚等（事務室）



床に散乱した楽器類（楽器倉庫）



体育館内の避難者
※敷物としてマット等を提供した



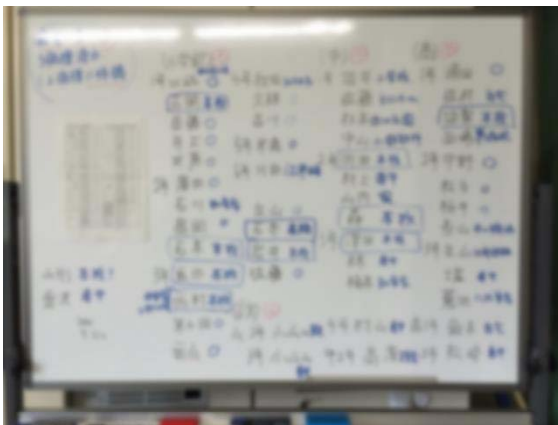
会議室内の避難者
※高齢の方には椅子の貸し出しを行った



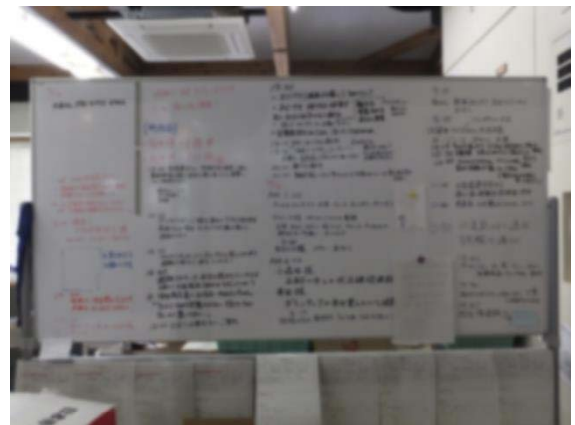
管理棟廊下前の避難者
(動物連れのエリア)



動物連れの避難者



本部のホワイトボード①
児童生徒・職員の安否・避難状況の記録



本部のホワイトボード②
支援物資等の記録



情報提供用に設置したテレビ
(事務室前)



授乳室及びおむつ交換室
※女性用更衣室としても利用



菓子パン110個の配給
※高齢の方等に考慮し、2回目以降は
屋内で配給することにした。



配給に並ぶ避難者
※以下の優先順位を設けて配給
①60歳以上の方を優先
②小学生未満児を優先
(1家族に1個ずつ配給)

2 「4. 17以降の学校」

(1) 児童生徒の本校への避難状況

保護者から「自宅近くの避難場に避難したが、大勢の人の中で落ち着かない」、「筋緊張が抜けず困っている」など、避難場所の確保に苦慮している声がたくさん寄せられ、全ての保護者や卒業生保護者に本校を避難所として開放していることを伝えた。その結果、延べ14家族、約60人が避難して来られた。

図書館前の防火扉で区画を設け、一般の方の避難エリアと本校生の避難エリアを分け、出入口も分けた。当初、一般の避難者から「教室を開放して欲しい」という要望があったが、医療的ケアが必要な重度の障がいの児童生徒が避難していることを丁寧に説明していったことで、理解を得ることができた。



(2) 避難所運営の経過

本校は臨時避難所として県の要請を受けて開設したため、物資の配給は全て熊本市の指定避難所に届いたものを本校に配分してもらうという方法で運営を行った。当初、支援物資もほとんど届かなかったが、避難者がSNSに物資不足を発信したことがきっかけとなり、その後は続々と物資が届き始めるようになった。

本震後から19日までは、校長を中心に駆けつけた総務部・事務職員・近隣に住む職員等、10名前後で避難所運営を行った。本校が避難所になっていることを知り、「ぜひ手伝いたい」という職員の声が寄せられたが、校内の敷地はほとんど避難者の車で埋め尽くされていたため、このような態勢で避難所運営を行うしかないと判断。20日からは運営委員のメンバーが出勤し、いくつかのグループに分かれ、組織的に避難所の対応を行うことになった。ほとんどの職員は22日まで「自宅待機」しながら、担当する児童生徒の家庭に連絡や訪問を行い、細かい状況把握に努めた。

4月17日（日）	10:45	休校連絡と職員のサービス、安全確保の呼びかけを配信 (校長→職員)
		熊本市から毛布75枚配布
	12:00	本校に避難中の児童生徒へお粥の炊き出しが始まる
	18:00	避難者への食事の配給の目途が立たず、アルファ米に水を加えて配給
	22:40	4/18（月）以降の職員の勤務について確認 避難所となっているため、職員駐車場の確保が困難な状況 管理職が宿直



近所の駄菓子屋さんからの差し入れの
お菓子をもらい喜ぶ子ども達



お菓子の配給に並ぶ子ども達
本校の児童生徒の姿もあった



本校職員による食事（アルファーマ）の準備



夕食配給の様子

<p>4月18日（月） 臨時休校</p>	<p>6:30 15:30 12:50 17:10</p>	<p>職員で朝食の準備をし、避難者に配給 4 / 2 2（金）までの休校連絡（特別支援教育課→学校） 日赤救護班来校 現在の学校の状況（避難者400人、断水等）、休校の期限、サービスについて配信（校長→職員） 熊本市立城西小学校に給水車到着 米は避難所ごとに準備しなければならず、校長が職員に宛てて避難者の食糧確保のための「お米一^{こめ}る」（米提供依頼メール）を配信 管理職が宿直</p>
<p>4月19日（火） 休校</p>	<p>午前 午後 17:00</p>	<p>避難所運営の協力要請（校長→本校運営委員） 「お米一^{こめ}る」を受けて、続々と職員から米が集まる 兵庫県教育委員会からチーム「EARTH」による支援が開始 近隣避難所で胃腸炎発生の情報を受け、感染症予防について館内放送で注意喚起 管理職が宿直</p>



本校職員が準備した朝食
(おにぎり、サンドイッチ等)



日赤救護班が来校



職員とボランティアで食事の配給



中高生にボランティアを募り、体調等で配給に並ぶのが難しい人へ食事を配った。

4月20日からは運営委員のメンバーで避難所運営を行った。本部・食事準備・水の運搬・ボランティア対応・支援物資対応の5班に分かれ、それぞれにチーフを置いて役割を分担して業務に当たったことで、管理職は、避難所運営の全体を見通すことができるようになり、学校再開に向けた準備を行うことができるようになった。

4月20日(水) 休校	午前	近況把握のための家庭訪問を指示(教頭→各担任) 自衛隊(城西小駐留)に米の炊き出しを依頼 雨水貯留槽の水が尽きたため、城西小プールの水汲み開始 (トイレ排水用の水として使用)
	午後	「EARTH」来校 「業務に専念できるよう避難所運営は市担当者が行う。職員は学校再開に向けた」ための体制づくりについて協議 運営委員が5班に分かれて避難所運営に当たる 管理職が宿直



自衛隊の協力で、白飯を確保することができた



ボランティアによる体操指導

4月21日(木) 休校	午前	避難所運営が軌道に乗り出したため、食事、掃除、ミーティング等の時間を決めて対応 県教育委員会(学校人事課)から支援者の派遣(4/22まで)
	午後	臨時校長会にて、5/9(木)までの休校を決定 休校連絡(各担任→保護者) 「EARTH」から、学校が熊本市に担当者の派遣要請をするように助言 校長から、職員駐車場所確保のため、車の移動を避難者に呼びかけ 城西小第2グラウンドを職員駐車場として借用 管理職が宿直

本校職員だけで避難所運営を行うことに限界を感じ、熊本市に職員の派遣を要請し続けたところ、ようやく4月22日から、市の職員が派遣されるようになった。とはいえ、派遣された職員は、どのように業務を進めてよいか分からない状況のままであった。決められた時間まで勤め終える頃に、また業務内容を理解していない別の職員が派遣されてくるので交代する・・・を繰り返す様子だった。派遣される担当者が代わるたびに、これまでの経緯や現在の課題、市の担当者に担ってほしい事柄を本校職員が説明することが続いた。市の職員と一緒に避難所運営の業務内容を進めながら、引継ぎも一緒に行うようにした。

4月27日からは、熊本市職員に食事配給の業務を全面的に引継ぎ、28日からは、避難所運営全般において、市担当者に引き継ぐことができたので、職員は、学校再開に向けた準備に専念できるようになった。



本校職員及び市職員による食事の準備(職員室)

(3) 避難所運営の方法

避難所運営については、事前にマニュアルがあったわけではなく、走りながら形を整えてきたというのが正直なところである。前項に記したように、4月19日に管理職が運営委員に呼びかけ、5つの班による業務体系をつくり、運営を進めたことが安定した運営につながっていった。随時、管理職が中心となってメンバーを集め、細かい確認を行う中で出てきたアイデアがそのまま避難所運営方法となった。

以下に、5つの班が担当した業務内容をまとめる。

ア 本部

避難所運営全般、マスコミ取材・各種問い合わせ等への対応、本校児童生徒の避難状況把握、職員の安否と被害状況把握、教室棟に避難している本校児童生徒の把握、学校再開に向けての準備、視察・来校者対応、お子様連れリスト・避難者リストの作成、避難所アンケートの集約、特別な配慮を必要とする避難者の把握とケア。

イ 水の運搬

トイレの水洗は、50tの地下タンクに溜まった雨水を使用していたが、断水が続いたことで5日目に水が尽きた。城西小学校プールへバケツを持って汲みに行くことが必要となったことによる、実施計画作成と実働。誰でも簡単に貯水タンクに溜めた水を汲み出すための自動汲み出し機の製作。

ウ 支援物資対応

物資の受け取りと記録・管理。支援物資の分配計画、保管場所の選定。

エ 食事準備

避難者への食事提供計画・準備と提供。(自衛隊との白米の炊飯量の連絡・調整、炊出しボランティアとの打ち合わせ、支援物資を確認して食事献立の検討と提供計画作成。)

オ ボランティア対応

ボランティア活動の割り振りと具体的な支援アドバイス。避難所内での掃除、食事の配給、水汲み時のボランティア要請と運営。



外部支援者との打ち合わせ



自動汲み出し機



全国から届いた支援物資



アルファ米



食事の準備



食事の配給に並べない人のための
ボランティアによる食事配り



ボランティアが子どもたちを
遊びに誘い、良い息抜きに

(4) 避難所運営で工夫したこと

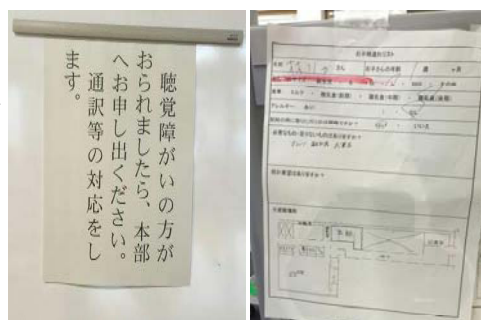
避難所の状況は刻々と変化していくため、運営に当たってはその変化に素早く対応することが求められた。マニュアル等の事前準備は無かった。総務部を中心に限られたメンバーが運営に当たりながら、次々と対応方法を決めていった。この時の対応の中から生まれた工夫を記す。

ア ミーティングの実施

避難所運営が軌道に乗り出した2日目からは、朝食の片づけが一段落した午前9時頃に朝のミーティング、夕食の片づけ後の午後8時頃を目途に夜のミーティングを行うようにした。

イ 要支援者へのサポート

熊本市の保護課・福祉課と連携しながら、体調等が心配される避難者についての様子確認や精神疾患を有する方へのメンタルサポートを行った。また、高齢者や小さな子どもを連れた避難者の困り感を考え、授乳室やオムツ交換場所を準備したり、食事の優先配給等を行ったりして安心して避難生活ができるように配慮した。



手話通訳の呼びかけ

お子様連れリスト

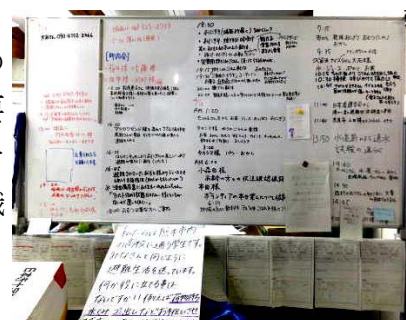
「お子様連れリスト」を作り、避難所内の就学前の子どもの状況（オムツのサイズ・食事内容・アレルギーの有無・食事配給の優先度等）を細かく把握した。手話通訳を必要とする方がいるかもしれないと考え、貼り紙により呼びかけを行った。

ウ 生活時間の設定

食事や一斉掃除、子どものおやつの時間等を設定して1日を過ごすようにしたことで、避難者の生活リズムが取れるようになった。避難者に一斉掃除を呼びかけると、自主的にゴミを集めたり、トイレ掃除をしたりという姿が見られるようになり、避難所全体に規則正しい生活リズムが生まれていった。

エ ホワイトボードの活用

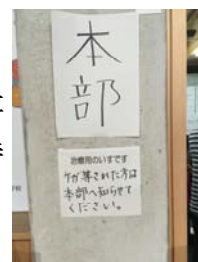
刻一刻と変わっていく避難所の状況や児童生徒の避難状況等、たくさんの情報を記録・整理する必要があった。ホワイトボードを使い、時系列で情報を書き込み、情報を共有した。避難所運営に当たる職員全員でミーティングを行うことは難しかったが、お互いがこのホワイトボードの情報を把握することで、業務を進めやすくなった。



情報を書き込んだホワイトボード

オ 校内放送や貼り紙の活用

避難者に食事配給のお知らせや一斉掃除の呼びかけを行う際に、校内放送設備や貼り紙を活用した。混乱が生じないように、食事配給の時間や配給の方法等は早めに避難者に知らせ、見通しを持ってスムーズに行動してもらえるよう呼びかけた。



本部前の貼り紙

3 学校再開に向けて

(1) 学校で取り組んだこと

ア 職員の勤務再開

学校再開の第一歩は職員が全員出勤できるような体制をつくることだった。そのためには、職員駐車場の確保が課題となった。避難者に理解を求めて駐車スペースを制限し、敷地内に職員駐車場を確保した。また、城西小学校に協力を依頼し、第2グラウンドを職員駐車場として使用させてもらった。こうすることで、4月25日から全職員の勤務が可能になった。避難所対応があることから、3パターンの勤務形態（7：30～16：00、8：30～17：00、12：30～21：00）を組み、さらに「食事準備」「環境整備・美化」「支援物資対応・整理」「本校に避難している在校生及び家族への対応」の4班に分かれて業務に当たるようにした。

全職員が揃った4月25日、校長からこれまでの経緯や今後の学校再開の目途、避難所対応の心構え等について説明があった。また、この日から校長が全ての職員と面談を行い、被災状況や困ったことがないかなどの聞き取りを行った。「避難所から出勤している」「怖くて夜だけは車中泊する」「家が壊れて住めなくなった」「アパートを引き払わなければならなくなった」などの状況が明らかになり、職員も被災した状況だが、子どもたちのために学校の日常を取り戻そうとがんばっていることが伝わってきた。

4月27日から、熊本市職員に食事配給の業務を全面的に引き継ぎ、翌28日からは、避難所運営全般において、市の担当者に引き継ぐことができたので、職員は学校再開に向けた準備に専念できるようになった。

イ 臨時総務会の開催

5月2日に臨時総務会を開き、児童生徒の現在の状況や校内安全点検の報告を行い、学校再開までのスケジュールを協議した。校内清掃や建物の消毒など、早急に取りかからなければならないことが目白押しだった。事務部が迅速に手配を

行い、学習環境が急ピッチで整えられることとなった。

また、保護者に伝えなければならないことを次のようにまとめた。

○学校の状況（避難所としての経緯、施設設備の安全性）

○災害発生時の保護者への児童生徒の受け渡し方法

○備蓄食料・薬等（3日分の備蓄食料、水、薬、おむつ、毛布、マット等）の準備

○余震が発生した時に学校が行う対応等

○簡易給食の実施

上記をまとめた文書を作成し、5月4日付けで保護者に郵送し、学校再開について周知することとした。

(2) 避難所運営の完了

4月28日に避難エリアの整理・縮小の第1段階として、体育館の区画整理を行い、管理棟廊下に避難していた方は体育館内へ移動してもらった。避難者への呼びかけ・説明を行ったのは城西小学校PTA会長と町内自治会長であった。

自治会長が「先生方が一生懸命に避難所運営において、尽力してくれている。しかし、学校も、学校再開に向けて動き出さなければならないので、避難されている皆さんも大変ではあるが、協力してほしい」と訴えてくださった。このことが、避難者の理解と協力につながり、混乱なく移動を行うことができた。

また、5月2日には熊本市職員から「避難所を3か所に集約すること」「本校避難所を5月8日に閉鎖すること」「5月10日から学校を再開すること」について説明が行われ、ほとんどの避難者は説明内容に理解を示し、この決定を快く受け入れたようだった。5月8日、退去する際は、避難者の方が本部まであいさつに来られ、謝意を伝えられる場面も多かった。24日間にわたる避難所運営は、この日に役目を終えた。

4 5. 10学校再開

(1) 学校再開の日

5月10日、予定通り、26日ぶりの学校再開。児童生徒の出席は小学部21人、中学部10人、高等部6人、訪問教育3人、分教室14人で、在籍児童生徒64人中54人が出席であった。欠席している児童生徒の中には、自宅での生活が再開できずに、家族と離れて施設に短期入所している生徒や体調が整わずに入院している児童生徒もいて、地震の影響を強く感じた。

10:30から本校と分教室をテレビ会議システムをつないで、「かがやき集会」が行われた。その日の学校日誌には次のように書かれている。「予定通り、本日から学校が再開した。子どもも保護者も学校再開を待ちわびていた様子で、昨夜眠れなかった子どもも複数いたということだったが、子どもたちの笑顔にあふれた1日だった。かがやき集会はテレビ会議システムを利用した初の本校・分教室の共同開催となったが、児童生徒にとってとても新鮮で有効だった。」



(2) 簡易給食の実施

給食を提供してもらっていた共同調理場から、「5月10日から13日までは簡易給食の実施予定」という連絡が入り、そのメニューを確認したところ、主食（パン又はご飯）・牛乳・副菜（チーズやナッツ類）・乳酸飲料であることが分かった。

「再調理しづらいものが多い」「タンパク質が少なめである」「温かいおかずが無く、食べづらい」ことに不安を感じた。そこで、給食用食材を取り扱う業者から温めれば食べられるレトルトやパウチした食材を購入し、学校で温め、通常の給食と同様に、給食二次加工を行う業者のスタッフに再調理してもらって子どもたちに提供しようと考えた。4日間の給食メニューは以下の一覧のとおりである。

実施日	主食	主菜	副菜
5/10 (火)	ミルクパン	照り焼きチキン	一食黒糖大豆・みかんゼリー・乳酸飲料
5/11 (水)	麦ごはん	カレー	ソフトチーズ・焼きクレープ・乳酸飲料
5/12 (木)	ごはん	筑前煮	青りんごゼリー・一食角チーズ・乳酸飲料
5/13 (金)	ミルクパン	肉団子	みかん果汁・ジャム・ヨーグルト・一食アーモンド・一食角チーズ



5月10日の給食



5月11日の給食



5月12日の給食



5月13日の給食

※上記のメニューに、牛乳が加わる。



食材を温める様子

カセットコンロを使用して加熱を行ったが、定められた温度まで食材の中心温度を上げるのが意外に難しく、提供までに時間がかかってしまうなど、少々の困難はあったが、久しぶりの給食を堪能している子どもたちの生き生きとした表情に、学校生活における給食の大切さを再確認した。

Ⅱ 熊本地震を振り返る

1 保護者の寄稿

熊本地震で経験したこと

小学部保護者 北時美咲

4月16日1時25分。本震は昨夜の前震の疲れもあり、いつものまにか寝ていました。叩きつけられるような揺れ、すごい音で起きました。子供達は「怖い怖い」と泣く。私も怖い。「大丈夫だよ」と言う私ですが、心臓の音、呼吸の音が隠し切れません。パパがさえを毛布にくるみ、外へ逃げました。私と息子とさなが逃げようとした直後に、ダンス、食器棚、冷蔵庫が倒れ、通れなくなりました。衝撃で窓の鍵が開かず……。何度もひじで叩き、やっと開き、窓から逃げました。裸足だったので色んな物を踏んだと思います。近くにスーパーがあり、車で避難している人が多かったので、引き返し車で行きました。車中で朝を迎えました。熊本かがやきの森支援学校に家族で避難していいですよと連絡をいただきましたが、距離的に近く、被害も少なかった私の妹の家に避難させてもらいました。自宅の瓦はとび、階段の天井は落ち、壁は崩れ、翌日の雨で家中は水浸し。倒壊の恐れがあり危険とのことで、避難指示の貼り紙。住んでいる地域は被害が大きかった所です。大規模半壊でした。放課後等デイサービスのキャンパスの皆様がすぐ受け入れてくださり、バナナやふりかけご飯を持たせ、施設の物資なども頂きました。さえは食べ物に困りませんでした。復旧するにつれ、「さえちゃんお風呂いいよ」と親戚、友達、いろんな人から声をかけてもらいました。毎日キャンパスで日中は過ごし、私たちは家の事ができ、本当に助かりました。先の見えない不安。続く余震。普通に暮らしていたときの事を思いました。一番辛かったのは、子供達はとても怖い経験をして心にダメージを受けたのに、家に帰ることができなかったことです。「いつ帰れるの？」という子供達。心が安まる時がありませんでした。崩れた家を見ると地震の怖い記憶がよみがえり、通るのも怖がっていましたが、今は更地になり、「前のおうち、そこだったね(^)」と言いながら通っています。熊本地震を経験し、たくさんの人からの支援、助け合い、つながりを改めて感じました。一日も早く、皆が幸せな日常になることを願います。

熊本地震を振り返って

小学部保護者 石川真実

平成28年4月16日1時25分、激しい揺れとともに室内は真っ暗、8歳の息子の呼吸器のアラームが鳴り響きました。室内はあらゆるものが倒れ、リビングには食器棚のガラス破片が散乱。睡眠時に呼吸器が必要な息子にとって、停電は何より怖いことでした。どうしたらよいのか茫然としている私に、同じマンションの方が、避難しないと危ないよ！と声をかけて下さいました。夫が助けを求めに行ってくれていました。近所の方3人が荷物をまとめる私の手元、足元を懐中電灯で照らし、医療機器からケア物品など大量の荷物を車に運び込み、車いすの息子を抱えて階段を降ろして下さいました。私たち家族だけでは、避難は到底難しいものでした。夫はすぐに仕事へ行かねばならず、医療的ケアの必要な長男、2歳の次男の3人で自宅を後にしました。一番の心配は、気管支炎を起こし、病院に通院中だった長男でした。呼吸器と吸引器の電源、休める場所を確保したいという思いで、車で自宅から5分ほどの東区役

所へ向かいました。前日に保健師さんより非常電源があると聞いていたからです。駐車場は満車、屋外でたくさんの方が地面に座り毛布にくるまっていた。電源は職員の机をかき分けていった奥にあり、息子を連れて行くのは困難でした。

車を走らせていると、ラジオから情報が流れてきました。熊本市民病院が倒壊の危険があり、入院患者を避難させていると。一瞬息が詰まりました。鳥肌が立ち、「泣きながら車を走らせました。熊本市民病院は息子が生まれたときからお世話になっている、命を繋いで下さっている大事な病院です。主治医や看護師さん方の顔が思い浮かび、ひたすら無事を祈りました。

熊本かがやきの森支援学校で朝を迎えましたが、息子達は落ち着かず、睡眠がとれませんでした。長男は顔色が悪く、病院にかかって、とにかく休ませなければなりません。主治医より、熊本市民病院での診療が不可能であると聞き、県北の実家へ帰りました。

実家の近所のクリニックへかかると、吸入器を手配して下さったり、大変親切にして下さいました。ひどい悪化はありませんでしたが、長引く咳で胃瘻トラブルが生じ、重症心身障がいと併せ持つ息子の病院探しに苦労しました。もちろん主治医からの診療情報提供書はありません。こういう病気の子どもは診たことない、と敬遠されることもありました。

熊本で生活が再開したのは、電気と水が復旧した2週間後でした。そこに至るまでは、長男を連れて実家と自宅の往復。ケアをしながらの後片付け、訪問看護も受けられず、ケアを代わる人がいないことは、やはり大変なことでした。しかし、こうして命が助かり、無事に自宅に戻れたことを、ただただうれしく思いました。私たち家族は身近な熊本の方々や全国の方々の支援と愛を頂いて、元気に過ごしています。この場をお借りして、感謝申し上げます。

熊本地震を振り返って

小学部保護者 高岡智加

平成28年4月14日、この日は夕方から娘が寝てしまい21時頃起きたので、迷いましたが、お風呂に入れ洗い場で娘を寝かせて体を洗っていた時に大きな揺れが起こりました。自分の体も支えられない状態で娘の顔だけ抱え上げてとにかく溺れないようにと必死でした。揺れが収まり辺りを見ると、湯船のお湯がほとんどなく、脱衣場と廊下が水浸しでした。その日は子供達は机の下に寝かせ、家族でかたまって過ごしました。テレビでいろいろな情報を知るたびにどうなってしまおうかと不安でした。16日の本震後は停電したため、近くの公園に車で避難しました。いつも子供達が遊んでいる公園が車でいっぱいになっており、異様な光景に恐怖を感じました。とにかく安全な場所に居ようと車中で過ごしました。その日の午後には電気は復旧し、自宅に戻りました。水道とガスは止まったため、水を近くの給水所へ何回も水くみに行きました。そこで色んな方に声をかけてもらい、救援物資の情報なども知ることができました。食事は家にあったレトルトや缶詰などを食べていました。娘は胃ろうからの注入食のため、ミキサー食を作るのは難しかったので、栄養剤で過ごしました。食事が変わると排便など体調の変化が心配でしたが、幸い体調を崩すことなく過ごせ

ました。地震の数日前に定期受診をしており、娘に必要な薬や栄養剤が十分にあったことはとても助かりました。胃ろうがあることもあり、体の清潔も心配でした。電気ポットやガスコンロでお湯を沸かして洗髪したり、清拭したりはしていましたが、なかなかさっぱりできませんでした。自衛隊の仮設風呂に行くと、娘の体の状態などを考慮し、優先して入れてもらえました。入浴中も「お手伝いできることがあれば言って下さい」と言っていた頂き、帰りも娘に「また来て下さいね」と笑顔で声をかけてもらい、とても嬉しく思いました。その後、ライフラインも復旧し、生活も安定しました。熊本地震からもうすぐ1年になります。時間が経つにつれ、日々の生活の中で地震のことを思い出すことも少なくなりました。しかしあのとき本当に多くの人助けと支えで乗り切れたこと、日々感謝の気持ちを忘れずに、これからも過ごしていきたいと思えます。

熊本地震を振り返って

小学部保護者 佐藤絵美

熊本地震から1年が経とうとしています。熊本城をはじめ、まだまだ地震後と変わっていない所がたくさんあります。自宅はブロック塀が倒れ、家の中はぐちゃぐちゃにはなりましたが、運よく地震前と変わらない状態で過ごすことができます。地震が起きた時、子供達はいつものように寝ていたので、特に怖がることもなく過ごしました。大人達の方が初めてのことで気が動転し、揺れを感じたらとりあえず外に出たりと、オロオロしていました。ご近所の家も倒壊しているところもあったりと普通ではない周りの様子に、ただただ驚きました。割と近所に家族が住んでいるので、皆で集まったり、一緒に過ごすようにしていたので、子供達も安心できたのではないかと思います。日頃から、食べ物や水、息子の医療的ケアに必要な物は備蓄していたので困ることはありませんでした。今回の地震は夜中だったので最小限の被害ですみましたが、子供達と一緒にいない時に起こっていたら・・・と考えてしまいます。いつでも家族と連絡する手段やそのときどうすればよいのかともう一度確認し合い、防災意識を高めていきたいです。

熊本地震の経験を通して

小学部保護者 古閑美香

4月14日、今まで経験したことのない大きな地震が起こりました。慌てて2階に寝ていた子供達を降ろし、家族6人外へ飛び出し、不安な夜を近くのスーパーの駐車場にて、多くの方々と一緒に過ごしました。

翌朝、数回の余震はありましたが、家に戻り、もう大きな地震は起こらないだろうと眠りについた夜中、再度の大地震に庭へ飛び出しました。西区は港に近いので津波が来るかもしれないと放送があり、逃げ場所を迷っていました。昼間に、娘の通っている熊本かがやきの森支援学校の先生より、安否確認の際、「何かあったら来て下さい」と電話を頂いていたことを思い出し、そのまま学校へ避難させていただきました。先生方は温かく迎え入れて下さり、大変感謝しております。おかげで不安な日々を学校で過ごすことができたため、その後の余震にも「ここは大丈夫」と子供達も

安心していたようでした。

この学校に通っている娘は、避難中に熱を出したことがありましたが、市民病院の先生・看護師さんが来て下さり、診ていただくことができました。また、酸素に関してもしばらくは自宅から持ってきたボンベにて対応しましたが、学校に届けていただき、助かりました。

上の娘も避難所にいるお兄さんお姉さんに遊んでもらったり、ボランティアの手伝いをさせていただいたことで、少しずつ不安な気持ちがなくなっていったように思います。その娘が食事を配る手伝いの際に、皆様から感謝の言葉をもらうことにより、自分から「ありがとうございます」「いかがですか」と声をかけている姿を見て嬉しく思いました。

地震が起きたことにより、家も被害に遭い、不安で不自由な日々でしたが、多くの方々から助けていただき、大切なことを改めて考えさせられたようにも思います。あの日からもうすぐ1年が経とうとしています。この経験を生かし、日頃から備えておくことが大切だとつくづく思いました。

熊本地震を振り返って

中学部保護者 佐藤裕子

いつもの夜、私と三人の子供達はリビングで過ごしていました。「今から帰る」との夫からのメールに「気をつけて」と返した直後、大きく揺れ始めました。「地震だ！」ハッとして座位保持椅子に座った娘を抱き降ろし、四人でテーブルの下に潜りました。その後も続く余震に朝まで車中で過ごしました。時には車が横転するのではと思う程の揺れに恐怖を感じました。夫は、震源となった益城町を通過して帰宅するのですが、通行不能となった道を迂回し数時間かけて帰ってきました。地震直後から、携帯電話が不通となり連絡がとれない中不安の帰宅でした。

翌日、我が家には実家から母や妹達が集まりました。古い実家で夜を過ごす不安からでした。皆が寝静まった夜一時半前、もの凄い揺れに飛び起きました。津波警報発令。隣接する家からはガラガラと瓦の落ちる音。駐車場から道に出るにはそこを通らねばならず、少し離れた場所にある妹の車へ走る事にしました。夫が娘を、私が息子を抱いて走り、全員が一台の車に乗り高台にある文化ホールへと急ぎました。渋滞の中ホールに辿り着き、普段はリハーサル室として使われている一室で朝まで過ごしました。

避難所となったホールは停電し、水も出ませんでした。日が明けると水と少しの食べ物が届きました。しかし、嚥下困難のある娘は胃瘻チューブや注射器を持って出なかった為、十分な水分も食事もとれませんでした。薬やオムツなどすぐに必要な物を入れた非常持出し品を車に積んでいたのですが、その車ごと自宅に残してきたからです。私は、余震に恐怖を感じながらも避難生活に必要な物を取りに戻りました。

避難所となったホールも地震の被害が大きく駐車場で過ごす人が多くいました。私達も母や妹達と車を並べました。娘は自宅から持ち出した経管栄養剤とレトルトパウチの介護食を食べました。昼は車いすに座ったり、テントの下で寝転んだり機嫌もよく過ごしていました。夜は車のシートに横になり私の隣でよく眠っていました。皆が

元気な事に安堵していましたが、二日目の夜、体調が急変しました。肺炎とてんかんの発作を起こしたのです。熊本大学病院で受け入れて下さったので、夫が娘に付き添い、私は二人の息子達と避難所に残りました。

避難所では職員の方の懸命の働きと県内外からのボランティアの方々に助けられました。食事は支援物資の中からパンや水、おにぎりということが多かったのですが、時には温かいご飯の炊き出しもありました。多くの人は夜避難所で過ごし、朝そこから出勤したり自宅の片づけに帰ったりしていました。顔見知りも増え、お互いに声を掛け合うようになりました。次第に余震も減り、自宅に電気や水が来るようになり車の数も減っていきました。私達はそこで十三日間過ごし、娘の退院の日に自宅に戻りました。

今回の地震で六年ぶりの入院をすることになった娘。地震後すぐに、かがやきの森の先生から学校が避難所となった事をお知らせ頂きました。しかし私は、余震の中を学校まで移動する事、母達と離れる事への不安があり地域の避難所を選びました。学校が再開して先生から「親戚の皆さんもご一緒にいいですよ」と声をかけて頂きました。安心して避難できる場所がある事を心強く感じています。今回の経験を今後に生かしていかなければと思います。

慣れ親しんだ風景が大きく変わり、傷が癒えるにはまだまだ時間がかかります。当たり前前の日常に感謝し日々を大切にしていきたいと思います。

地震から学んだこと

江津湖療育医療センター分教室小学部保護者 西山けい

4月14日の前震の日、私は次男の入院先から実家に預けている子供達を迎えに行く途中で地震に遭いました。突然の大きな揺れに何が起きたのかわからず、このまま車で病院に戻るべきか、実家に行くべきかを悩みました。大きな揺れだったので、病院に行くとは邪魔になると思い、実家を選びました。周囲は停電しており、車のライトで道を進み、家に着くと携帯の明かりで玄関のドアを開けました。家の中は滅茶苦茶でしたが、幸いにも全員無事でした。私を心配していた長男が、私の顔を見て安心した途端に泣き出したのを覚えています。

余震が続き、幼い娘達が離れたがらなかったのも、気にしつつも次男の所へ行けたのは、本震の日の昼頃だったかと思います。(その間、病院から無事との連絡あり。) 大きな病院のあちこちにひびが入り、院内には全国から集まった救援チームがたくさんいました。その様子を見て改めて地震の大きさを実感しました。

病棟では、スタッフがいつも通りに仕事をしていました。いつもと違ったことは、停電に備え、ベッドに氏名や病名、薬などが書いてある手書きの紙が貼られていたことです。また、余震のたびに呼吸器のチェックにも来られました。水不足で体を洗えない時でも、使い捨てのもので清潔を保ってくれていました。スタッフ自身も被災している中で、少しでも病院の日常を守ろうと努力してくれている人達に、次男は大事にされていると感じ、感謝の気持ちでいっぱいになりました。今回の地震では、家族の絆を再認識でき、当たり前のように日常を守ってくれている人達がいることを改めて教えてくれたできごとだったと思います。

地震を経験して思うこと

高等部保護者 西嶋美恵

息子は24時間人工呼吸器装着、酸素療法、気管吸引、胃瘻注入などの医療的ケアが必要な子です。

前震は、一時的に停電しました。その時主人がすぐに風呂に水を張りました。その後主人は仕事場に行き、不在になりました。懐中電灯と酸素ボンベとアンビューを用意し寝ている時に、本震に襲われました。携帯の地震警報が鳴り響く中、息子達を守りながら、呼吸器を押さえるので精一杯でした。揺れの途中で真っ暗に。懐中電灯をつけ、息子の呼吸状態を確認しました。息子はやや固まった表情でした。下の子は祖母の手を握ったまま顔もこわばり震えていました。けれどもみんな怪我はありませんでした。「大丈夫だからね！」と声をかけ、自分の気持ちを落ち着かせながら、外出する時のようにバギーに呼吸器、吸引器、ケア用具を載せ、息子を移動させ車の中へ乗せ込みました。呼吸器と加湿器の電源は車の中で確保できました。下の子も車に避難させ、急いで最小限の荷物をバッグに詰め込み、最後に車に乗り込みました。そして市民病院へ避難しようと思っていると、ラジオから聞こえてきたのは市民病院倒壊の恐れ……。情報に驚愕していると、携帯に主人からの連絡があり、安堵しました。お互いの無事を確認し、自宅駐車場で待機することに。夜が明け、近隣の様子を見て再び自宅に入ると、生活ラインは止まっていました。ただ昨夜主人が張った風呂の水でトイレはなんとか使用できました。呼吸器の電源を車から発電機に切り替え、主治医と連絡相談し、近くの病院へ電源確保のために家族4人で避難することになりました。余震が続く中、一晚を過ごし、ライフラインの復旧のめどもつかず、この先主人の夜勤が続く状態が想定され、主人の提案で地震被害が少なかった主人の実家のある天草へ、私と2人の息子で避難する決断をしました。

この地震で道路状況もわからない中、医療業者には酸素の濃縮機器を八代営業所から天草の実家まで、連絡からすぐに運んで届けてもらいました。天草へ向かう道路も宇土周辺までは途中段差があったり、路肩が崩れていたり、まだ地震から日も浅かったので緊急車両が道路を行き交っていました。

実家の避難生活では、地震の恐怖、環境の変化で下の子が体調を崩してしまい、息子の医療的ケアで24時間離れられない私は、一人では病院へ連れて行ってやることも困難な状況になり、隣町の医療体制が整っている施設に相談し、息子を受け入れてもらいました。また隣接する特別支援学校の先生方にもお世話になりました。下の子は、隣の校区の保育園に受け入れてもらい、同年齢児と過ごす場ができるようになりました。地震以降、私もようやく下の子に一对一で寄り添えるようになり、精神的に支えてあげることができました。

今回、遠くに避難する決断ができたのは、地震数日前に在宅の物品1ヶ月分支給と内服薬1ヶ月分の処方があったばかりで、手元にたくさんあったことと、日頃から学校へ通学し、外出移動になれていたことが幸いしたのではないかと思います。また、息子の修学旅行などで主治医に書いてもらっていた医療の情報提供書をいつも保険証と持ち歩いていたため、避難先での施設受け入れがスムーズにいきました。

今回の熊本地震では「決して災害時は一人ではやれない」ことを痛感し、避難先で

支援して下さった方々、関わって下さった方々に感謝し、人と人とのつながりの大切さを知りました。今後同じようなことがあっても同じ避難ができるとは限りません。災害は備えも大事ですが、その時の状況での判断も重要な避難につながるように思います。そして、当たり前前の生活に何よりも感謝して生きなければならないと思いました。

熊本地震の記録

高等部保護者 長山文代

9時過ぎた。そろそろ次女をお風呂に入れないと……。そう思いトイレ誘導をしていた。突然、ドオオオン！！と体が左右に揺さぶられた。自宅は8階建てマンションの6階。慌てて立ち上がる次女を抱き寄せ、自室のベッドでうとうとしていた長女の名前を呼んだ。返事がない。もう一度名前を叫んだら返事があった。怪我がないことを確認した。大きな地震だから避難すること。足を怪我しないために靴を履くこと。避難できる服に着替え、外は寒いから上着を羽織ること。携帯の充電コードを持参すること。2人の娘に言い聞かせ自分も着替えた。次女は17歳、重度の知的障害。言葉は出ない。手つなぎ歩行はできるが6階から避難階段を怪我せず降りなくてはならない。手早く準備を済ませ玄関に3人集まり、もう一度娘に言い聞かせた。「○○ちゃん、地震が来てここは危ないから避難するよ。コートを着て、靴を履くよ！」いつもなら出かけるときには何かしら抵抗を示す次女は、私の強めの口調に素直に従った。ドアを開け、ブレーカーを落としたら、主人が帰ってきた。「怖かったね。」主人の声に安堵し力が抜けそうになった。もう一度部屋の中を見回した。ブレーカーを落とし、ガスの元栓と水道栓を閉めて家を出た。動かないエレベータを素通りし、隣の避難階段に来た。ここでも子供たちに言い聞かせた。「絶対怪我しないように。階段を踏み外さないように。」次女と手をつなぎ階段を下りた。「1、2、1、2、……」長女もすぐ側についてくれた。主人は3人を見守るように一緒に階段を下りた。1階まで無事にたどり着いたとき、子供たちをほめ主人と顔を見合わせた。近隣の銀行の駐車場に身を寄せると、マンションの住民の方たちもぞくぞくと集まった。誰もがマンションは倒れるか潰れると思った。お互いに体調などを気遣った。次女は続く余震のたびに地面が震える気持ち悪さで、居ても立っても居られないと体全身で表現し、ふらふらと歩きだそうとする。そのたびに抱き寄せるを繰り返した。携帯にはメッセージが届き始めた。担任の先生とも連絡が取れ、次女の学校の保護者とも安否確認をした。遠方の旧友たちがSNSで支えてくれた。近隣の人々は指定避難所に向かうか思案中だが、我が家は次女を抱えてのそこへの避難はまず無理。駐車場にしゃがんでいるのも困難になる。主人はマンションに毛布などを取りに行き、駐車場から車を乗り寄せ、娘たちを乗せた。近隣の方と情報を交換し、震源から離れた職場に行くことを伝えた。高齢者の福祉事業を運営しているため、利用者の安否や被害状況も確認する必要がある。ここから車で20分。途中の道路が寸断されていたら？職場がもし壊滅状態だったら？様々なことが脳裏を過る。余震で軋むガソリンスタンドで給油し職場に向かった。道路はところどころ亀裂が入り水道管が破裂していた。0時過ぎ、仕事場は静まり返って迎え入れてくれた。余震が続く不安な一夜を過ごした。次女は不安感を

紛らわすためにキーボードを大音量で鳴らし始めた。緊張して手はじっとりと湿っていた。

夜が明け始めた。職員の無事を確認した後、利用者と家族の安否確認をし、本日は休業する旨を伝える連絡を始めた。同時に県外に居る長男とも連絡が取れた。実家の家族や友人たちに無事を知らせた。主人の友人たちからは、職場にメールが続々と送られてきた。ある程度連絡が済んだら自宅が気になり始めた。単独行動は危険なため、明るいうちに家族みんなで動こうと判断。だが問題がある。散乱した6階の自宅に、階段を使い次女を連れていくのは非常に危険を伴う。罪悪感と断腸の思いで次女をマンション駐車場の車に残し、主人と長女と私の3人で階段を駆け上がった。玄関のドアはストッパーで開放し、私は玄関付近の片付けをした。主人と長女はテレビや棚などの耐震補強をした。長女が飼っていたザリガニもケースごと持ち出し一緒に避難することにした。あっという間に1時間が過ぎた。次女が気になる。つらい気持ちで階段を下りた。遠くから次女の姿が見えた。うつむいている……。血の気が引いた。普段は上を向く姿勢が多いからだ。夏場、車内に放置されて亡くなる乳幼児の死亡事故が頭をかすめた。「○○ちゃん！！」大きな声で呼ぶと、ふわーっと頭を起こした。

「ごめんね、ごめんね」と何度も謝った。職場に帰る途中、次女が好きな惣菜やパンを買った。店が営業していることと商品の陳列の少なさに驚いた。職場のライフラインは問題無かった。再び連絡業務を始めた。余震は依然続いていた。睡眠は取れる時にと仮眠を取るが、なかなか眠れない。次女はキーボードでリズム音楽を聴きながら眠っている。みんなが静かになり私もうとうとし始めたとき、次女がキーボードの電池が切れたと、起こしに来た。電池を入れ替え一緒にベッドに戻り、次女に布団をかけた。もう少し眠ろうと布団にもぐったとたん。「ドドオーン！！！」建物は軋み、天井のファンはブランコのように揺れた。思わず声を上げた。みんなも飛び起きた。付けっ放しのテレビから後に本震とわかる。自宅のマンションにはもう戻れないかもしれない。愕然としながら夜が明けるのを待つしかなかった。次々に明らかになる被害状況。生まれて初めて経験する大地震。膝ががくがく震えだした。

夜が明け、利用者と家族の安否確認をし、しばらく休業する旨を伝えた。職員と手分けして自宅訪問もした。訪問中、近隣が断水していることが分かった。職場は地下水を使用しているため、水道は無事だ。家族にいつでも給水に来るように勧めた。そして近所の方にもいつでも給水に来て下さいと伝えてもらった。職場に戻り連絡業務を続ける中、ポリ容器など持参し給水する方が増えてきた。外の水道には「水出ます。いつでもどうぞ！！」と貼り紙もした。どこかの大学生が避難所に水を運びたいとトラックで乗付け、温泉を運ぶような大きなポリタンクに水を入れていた。やがて救援物資が届き始めた。主人は全国規模の研究会の会員であり、東日本大震災の時被災した会員に物資を届ける手配をしたことがあった。東北が壊滅状態の時、新潟の会員に物資を届け自家用車に積み込み運んでもらった。水や食料、おむつなどは勿論のこと、ガソリンを運ぶための携行缶もたくさん送った。今度は、東北や全国から、大牟田に物資が集まり、会員が熊本に届けてくれる。今回は震源地から離れているここに物資が集まった。震源地付近で被災した会員や家族が物資を取りに来たとき、情報交換もしながら精神的にも支え合った。救援物資が山のようになり始めた頃、次女の学校が

避難所になっている情報が入った。足りない物資を保護者にSNSで尋ね、自宅の片付けに行く途中に届けた。学び舎は体育館や廊下に人が溢れ、駐車場はペットの犬も多くいた。本校の児童生徒家族は体育館での避難所生活は厳しく、また医療的ケアが必要な子供もいるため教室棟に避難していた。水や食料、おむつや使い捨て手袋、手指消毒液など先生方が荷物を下すのを手伝ってくれた。校舎が臨時避難所になり、先生方がお世話をされていた。ご自身も被災されているのにと胸が熱くなった。仕事の連絡業務等があるので次女と主人は職場に残し、長女と2人で自宅の片付けに行った。本震の後、マンションはいたるところにひびが入っていた。恐る恐るカギを開けると、棚や子供たちの机までも倒れている。書棚の耐震棒は外れ、天井に穴が開いている。リビングのドアには内側から食器棚がもたれ掛かり中に入れず。食器類が飛び出して粉々に割れているのが見えた。前震の日に作っていた料理も鍋ごとひっくり返っている。トイレの水も揺れでこぼれてしまっていた。とにかく女2人ではどうすることも出来ず、主人と次女がいる職場に戻り、今度は娘たちを職場に残し、主人と2人で片付けに行った。何とかこじ開けリビングに入り込むと、愕然とし言葉を失った。もしここに残っていたら、間違いなく命は無かった。時間を決めて短時間で片付けに入った。毎日少しずつ片付けに行った。移動途中に見かける県外の車の多さに目頭が熱くなった。救援活動をされていた。職場に給水に来た近隣の方から、「うちは、水は出ないけどこれならあります。」とイチゴ農家さんが手作りのイチゴジャムをくださった。農家の方が野菜をくださった。感謝の言葉をたくさんいただき、水の有難さを改めて感じた。次女は避難所生活で生活リズムが崩れてきた。支援相談員の先生に、職場から近いデイサービスを紹介してもらい通い始めた。初めての所は慣れるまでどうかと心配を余所にあっさり慣れてしまった。明るく迎え入れてくださったスタッフの方に感謝している。地震が収まった現在も利用を続けている。次女は学校再開まで、デイサービスとショートステイを利用することができた。職場も部分的に事業再開し始めた。やはり利用者と顔を見合わせるとお互い安心する。「100年生きてきてこんなにしつこい地震は初めてだ」と言われる方もいれば、「戦争の方が怖かった」と言われる方もおられた。1日も早く通常に戻ることができるよう祈りながら業務にあたった。宅配便が再開し、友人からの物資が届くようになった。たくさんの水、電池、栄養ゼリー、風邪薬、ビタミン剤、湿布、清潔用品等。箱を開けるたびに涙が溢れた。

熊本地震からやがて1年。今もなお全国や海外からも温かいメッセージが寄せられ、物資や義援金が送られ、各種イベント等が熊本復興に向けて開催されている。感謝の気持ちは言い尽くせない。職場の近くでは、今も毎日がれきを積んだトラックが災害ごみを受け入れる処理場へ走っている。日々の生活は、元の穏やかさを取り戻しつつある。マンションの住民の方や近隣の方々との挨拶や会話が、地震の前より多くなったのは確かであり、いざとなれば命がけで支え合うことができると確信した1年だった。

熊本地震を経験して

熊本支援学校卒業生保護者 藤岡浩子
(平成23年度 熊本養護学校卒業 藤岡祐機)

熊本地震からもうすぐ1年。つい先日の事のように感じます。

① 4/14 前震

揺れた瞬間『ただ事ではない』と直感しました。息子のいる2階に駆け上がろうとしても、真っ直ぐ上がれない。その時でした。話せないあの子の『わぁ...』という声が聞こえたのです。声というより、身体全体から湧き出る恐怖だと思いました。私はあの子が産まれて初めてあんなに恐ろしそうな声を出すのを聞きました。とにかく、怯える手を取り、トイレに逃げ込み、身長174cmの大きいあの子を抱いて『大丈夫、お母さんおるけんね』と言いつつ、どうしていいのかわからない。車で近くの駐車場に避難して、家に戻ったのはもう明け方でした。

② 4/16 本震

15日の夜、揺れに怯えながらも、いつものように2階で寝ようとしたのですが、息子が私たちの手を取り『下に降りる』と訴えました。私たち夫婦は『大事な時は祐機の言う通りにしよう』と決めていますので、1階へ降りました。そして2時間後の本震。すぐさま車で避難し、家に戻ったのは昼前。あの時、2階にいたら逃げる前に怪我をしていたと思います。

我が家は80代の高齢者が3人。そして息子がいます。息子は重度の知的障害。自傷他傷もあります。普通に生活していても『冷たい目』は注がれます。『冷たい声』は聞こえてきます。その息子を連れ避難所に行くことはできません。避難所という選択肢は我が家にはありませんでした。

③ 避難(愛隣館)

途方に暮れていたところに山鹿市の愛隣館から『大丈夫ですか?』と、一本の電話をいただき、私たち家族は山鹿へ向かいました。道は隆起し、亀裂が走り、周りの景色も一変している中、すれ違う車は殆どが県外からの災害復旧車両。福岡、兵庫、京都…何時間かけて来てくれたのだろうか、心から感謝しました。

④ 避難(熊本かがやきの森支援学校)

次に助けていただいたのは、熊本かがやきの森支援学校でした。我が家の現状を人づてにお聞きになった五瀬校長先生から『こちらにどうぞ』とご連絡をいただきました。

20日の夜から1週間お世話になり、学校のご配慮により保護者控え室を使わせていただき、本当に心から休まることが出来ました。おかげさまで息子もパニックを起こすことはありませんでした。

懐かしい先生方、避難されていた保護者の皆さん。顔を見るだけで『学校だ...』と安堵し、同じ学校で過ごしたお母さんたちと、子どもの事を話し、とにかく無事で良かったと手を取り合えることに、どれだけ救われたかわかりません。

学校では先生方が泊まり込みでした。日中は『生徒たちの家をまわってきます』と支援物資を片手に足早に出掛ける先生、『我が家もいろんなものが倒れています

が大丈夫』と、私たちには心配かけまいと笑顔で答えてくださる先生。先生方も皆、被災されているのです。出掛ける先生に『行ってらっしゃい、気をつけて』と声をかけ、ありがとうと手を合わせることは出来ても、情けないかな、私は、息子と我が家の事だけで精一杯でした。

そんな中、4/23の夜に熊本支援学校前校長の高橋先生から『備蓄水と発電機で避難されている皆さんが助かっておられるそうですよ』という、メールが届きました。

⑤ 大切なつながり

遡ること、2011年の8月。息子が熊本支援学校に在学中の頃、私はPTA役員として、知的障害教育校の全国大会に出席。2011年は東日本大震災の年であり、被災された方から、当時のお話を聞かせて頂きました。

『職場では多くの方が亡くなりました』『当日は学校行事があり、息子は早く帰り、無事でした。行事がなければ、どうなっていたかわかりません』と。

『2人の障害児を抱え、避難所にも行けず、ご近所の方にパンをもらいました。これが1度の経験（震災）だったので、どうにか過ごせました。ただ、もう2回目は無理です』とお話くださいました。

この子たちを抱えて被災するということはこういう事なんだ。大変な状況下、全国の同じ立場の私たち、現実を伝える為に来て下さっているのだ。私はお二人の話を聞きながら、涙が止まりませんでした。

このお二人の思いを『必ず熊本に持って帰る』と思ったのです。あの時、ものすごく強い気持ちが自分を動かしたことを今でも覚えています。学校に帰り、皆と話し、備蓄水の購入、当時第I学部（現在の、熊本かがやきの森支援学校の皆さん）も在籍していたので、人工呼吸器等の電源確保のため、発電機を購入。それから保護者の皆さんにお願いして防災リュックの準備をしました。

高橋先生からのメールを読んだ時、地震以降ずっと張り詰めていたものと、『あの時のお二人の気持ちが届いたんだ』という気持ちが一緒になって堰を切ったように涙が溢れました。

⑥ これから

地震から約1年。不安で苦しい時間を過ごしました。忘れ得ぬ記憶となりました。でも、人の繋がりや温もりを知りました。

手をさしのべていただいた2カ所の皆さま、全国からのご支援、国からの補助。東北からの繋がり。

我が家に関しては、今でも『人には頼れない、自分たちでどうにかしなくては』という気持ちに変わりはありません。ただ、今回の事を経験して、何か困った時は、少しだけお願いしてもいいのかなと思えるようになりました。

でも、そこには『お互いさま』『おかげさまで』『お世話になります』という気持ちを、いつも持ち続けてこそだと思います。

2 職員の寄稿

熊本地震を振り返って

教頭 富永佐世子

平成28年4月15日午前1時頃、本校は県施設課の要請を受け、臨時避難所として開設いたしました。その日は、金曜日の授業日でしたが、児童生徒の安全確保と避難者受け入れのために学校を臨時休校としました。何とか出勤してきた職員で無事と被害状況を確認し、月曜からの登校に備えて散乱した物の片づけと受け入れ準備を行っていきました。当時、臨時避難所として開設された本校に避難して来られたのは、益城町在住の中学部生徒家族の一家族だけでした。避難してくる生徒の不安を少しでも取り除くことが出来ればと、普段生活している中学部の教室に避難してもらいました。

臨時避難所として開設していた為、教頭が宿直当番として学校の事務室に泊まり、翌朝5時に学校長と交代する予定でした。正面玄関を開け、避難者受付名簿を準備して避難者を待ちましたが、結局日付が変わった16日の午前1時を過ぎてもだれも避難して来られないため、教室棟避難家族の様子伺いに行った後、仮眠をとろうと事務室中央付近に横になった途端、本震が発生しました。

「ゴーーー！」という地響きにも似た音とともに学校が揺れ始め、その揺れはどんどん強く、激しくなっていきました。私は、慌てて飛び起きました。飛び起きた瞬間、横にあった鋼製棚が西側のテーブルに倒れ、ガラスの扉が割れて中の書類が一気に飛び出してきました。私自身、ガラスが散乱し鋼製棚が倒れかかっているテーブルに必死しがみつき、揺れが治まるまでの間をひたすら耐えたことを記憶しています。そしてまだ揺れが完全に収まらないうちに地域全体が停電となり、学校も真っ暗になりましたが、本校には自家発電装置があるのですぐに復電すると自分に言い聞かせていました。しかし、電気の心配よりも、教室棟に避難されている在校生家族の安否が心配になり、事務室を飛び出しました。校舎の至る所にガラスが多用されているため、あの猛烈な揺れではガラスが割れ、散乱しているとばかり思っていました。廊下などのガラスは一枚も割れることもなく、暗闇の中では何の変化もないように思われ安堵しました。そして、中学部棟へ向かおうと職員室前を通り過ぎたところで、外の駐車場付近に目をやると、沢山の車が校門の外に数珠つなぎになっている光景が目に入り、思わず外に飛び出し、本校駐車場への車の誘導を行いました。その頃、ちょうど西日本警備の警備員も巡回で来校されており、その警備員に駐車場への誘導を託し、私は避難者の校内受け入れを行いました。押し寄せて来られるたくさんの避難者を受け入れることに無我夢中の中、近隣に居住している教職員や事務職員が我が子等を連れていち早く駆けつけ、避難者の受け入れや復電操作等に奔走してくれたこと、大変心強く、嬉しく思いました。

発災後、無我夢中で地域住民避難者を受け入れていきましたが、その為に在校生の安否確認がおくれ、本震発生後約1時間30分が経過した、午前3時に総務部ライングループが作成され、携帯メールとラインを併用しながらの安否確認を主事・主任を中心に開始していきました。また、事務室を本部として開設し、ホワイトボードに児童生徒・職員の安否確認状況、様々な連絡事項、伝言、提供された支援物資等の事柄

を書き出して行きました。ホワイトボードが書き出した事柄で一杯になったら、デジタルカメラで撮影した後に消すという事に徹して行きました。電話回線が繋がりにくい中、本校総務部はグループラインやライン電話、携帯メール等複数の連絡手段が確保できていたため、滞りなく連絡を取り合い、更には継時的な記録としても残すことができました。

大地震の発生で混乱する中、様々な職種・立場の違う職員が、自身も家族も被災しているにもかかわらず、学校が心配になってたくさん駆けつけてきてくれました。発災時から避難所運営に携わっていただいた、総務部等の職員も、後日談として話されたことですが、自宅が大きな被害を受けておられて、建て替えも視野に入れて検討されていると聞きました。また、居住地域の地震による被害があまりなかったと言いながら、たくさんの差し入れを抱えて、駆けつけてくれた職員もいました。被災当初は、本校が臨時避難所として開設されていることを、熊本市自治体に把握されていなかったために、避難者への食料提供もままならない状況でした。当然、運営している職員に食事を提供できる状況ではなかったのですが、差し入れでいただいた物をみんなで分け、空腹を凌がせてもらいました。その時に食べた「サバの缶詰」は私の思い出の味となりました。

避難所運営では、被災当初から市担当者が派遣されるまでの間、約2週間を学校長を中心として、限られた学校職員で運営を行って行きました。学校職員の出勤要請については、まずは自身の身の安全確保や家の片づけ、家族の水・食料の調達等に当たってもらいました。また、学校が避難所となりたくさんの方が避難されている状況から、職員が出勤しても車を止める場所もないことや、職員玄関にも避難されている方がいること、職員室は支援物資の保管場所、食事準備場所となっていたなどの諸事情が背景にあったため、大半の職員は自宅待機とし、随時子どもの安否確認などのための、家庭訪問や避難先訪問等を行ってもらいました。その際、必要に応じて、本校に届いている支援物資を一緒に届けるようにしました。

マニュアルなどない中での避難所運営であったため、随時、学校長または教頭がメンバーを招集し、細かい確認を行なうように心がけて行きました。そして、避難所運営が軌道に乗り出した2日目からは、朝食の片づけが一段落した午前9時頃に朝のミーティング、夕食の片づけ後の午後8時頃を目途に夜のミーティングをメンバーを招集して行うようにしました。朝のミーティング内容は、各業務のチーフの確認と業務担当者、メンバーの確認、業務内容、1日のスケジュール及び昨日からの引き継ぎ事項の確認等です。夜のミーティングでは、各業務内容の報告や翌日の食事メニュー、食事提供時間の確認。翌日のスケジュールやメンバーの確認等を行って行きました。ミーティングの時間を予め決めてはいましたが、様々な業務に追われ、夜のミーティング開始時間が午後10時になり、終わるのは11時を過ぎることも度々ありました。そして、翌朝は朝食の用意のために、午前6時頃には出勤してもらおうという日々が続きました。尚且つ、宿直のローテーションにも入ってもらいました。被災後、混乱した状況下ではありましたが、限られた学校職員で避難所運営を行ったことで、円滑できめ細やかな避難所運営ができたのではないかと感じています。しかし、対応した職員も被災者であるにも関わらず、早朝から深夜まで、労を惜しまず、献身的に頑張っ

てくれました。本当に頭の下がる思いです。

この度の熊本地震では、熊本の自然豊かな光景や普段の生活がいつまでも続くものと、何の疑いもなく思っていました。大規模災害など、他人ごとであって、自分には降りかかってこない、熊本では発生しないことだと思い込んでいました。しかし、大規模災害はどこで起こってもおかしくないということを、改めて学びました。また、災害時はたくさんの方が学校に避難して来られるということを実に体感することもできました。

この教訓をしっかりと生かすことができるよう、私にはこの体験を少しでも多くの学校関係者に語り、各学校が危機感を高めて、事前に備えていくことができるようにしていく使命があると考えています。

熊本地震を振り返って

事務長 重松憲明

平成28年4月14日木曜日、21時26分の前震から始まった熊本地震について、事務室に勤務する1人の事務職員として思ったことを残しておこうと思う。本校に赴任して2週間が経過し、まだ学校のことについてほとんど知識がない中に地震に見舞われた。前震以降の3日間で起こった大きな地震はおおむね以下のとおりである。

4月14日（木）21：26 震度6弱（M6.5）前震

4月14日（木）22：07 震度5弱（M5.8）

4月15日（金）00：03 震度5強（M6.4）

4月16日（土）01：25 震度6強（M7.3）本震

4月16日（土）01：45 震度5弱（M5.9）

⑦ 熊本市西区春日の観測地点（本校に最も近い観測地点）での数値

この他に震度4以下の地震が多発し、いつまた大きな揺れがくるのかと不安と緊張の日々が続くことになる。

前震後、体育館を避難所として使用可能かとの連絡が施設課から私の携帯電話に入った。被災した熊本市を、住居のある東区から西区に抜け学校に到着、校舎の被害状況を目視で確認後、日付が変わった4月15日の深夜1時に、校長の決断で臨時的な避難所として開設した。開設後は避難者名簿の作成等をしながら朝を迎え、休校となった4月15日は、被害状況の把握と報告、翌週からの学校再開に向けての片づけ等を行った。その他、週末の期間中に避難所の宿直対応をする職員のシフトなどを管理職で検討して決め、前日から睡眠をとっていなかったため、その日の宿直を務める教頭におまかせして家路についた。このときは余震がしばらく続くものの、さらに大きな地震が数時間後に起こるとは全く想像していなかった。4月16日の本震後には数

百人の近隣住民の方が避難されていたが、本校は臨時的な避難所であり、熊本市からの職員派遣や物資の配給等がなかったため、運営には本校の職員があたっていた。混乱した状況の中、避難者の安全な環境の確保と、学校の施設・設備の管理という大きな役割を事務室が担うことになる。

このような大きな災害を経験し思うことは、ライフラインが断たれた場合への備えと、施設・設備の日常の管理がいかに重要かということである。水道や電気の供給が一時的にない状況は経験したこともあるが、2週間以上水道が使用できない状況で、衛生的な環境を維持することの困難さを思い知った。学校単体での備えには限界があるが、できる限りの準備をしておく。また、施設や設備について常に現在の状況を把握しておかなければ、災害による損傷なのか、もともとあった損傷なのか判断もつかない。小さな損傷も日常の点検から早期に発見し補修をしておくことで、被害も最小限に抑えることができる。

私は、赴任後まもなく今回の地震に遭遇したが、「開校後3年目の新しい学校で、校舎も新たに建築された耐震性に優れた校舎であり、かつ損傷などが全くない状況で今回の地震に遭遇したこと」、「事務室のスタッフが開校時から勤務してきた職員で構成されており、施設・設備の状況を概ね把握していたこと」、「営繕に詳しいベテランの事務職員がいたこと」などから、頻発する地震の中でも、混乱することなく適切な対応を速やかに取れたと思う。

「備えあれば憂いなし」・・・備えることは大切であるが、何に対しどう備えるか、今回の熊本地震を経験して学んだことが「ライフラインが断たれた場合への備え」と「施設・設備の管理」であった。今後の事務職員としての業務と、日常生活での備えとしてこの経験を教訓としたい。

避難所運営を振り返って

小学部主事 金澤姿子

16日の本震で、夜が明けると同時に足の踏み場もないほど物が散乱し、窓が外れ、壁が崩れた自宅に戻り、何とか床の上のものを片付けて学校に電話しました。無理はいえないけど、よかったら来てほしい・・・という教頭先生の言葉に学校に来てみると、自治会の方が交通誘導をしておられ、すでに校内は車の置場もない状態になっていました。予想以上の避難者数に驚きながら校内に入ったのは、11時頃ではなかったかと記憶しています。まず本校の児童生徒とその家族が避難している教室棟へ行ってみると、不安そうな顔のお母さん方に遭遇。大変だったですね・・・と言うより早く、一般の避難者の方々が覗き込んできて怖いから教室のブラインドを全部降ろしてしまった、と言われます。そうなんですね・・・と言いながら、見回っていた時でしょうか、一人の男性が寄ってこられ、「向こうの避難所で自分たちは足の踏み場もないほどだ。こっちは随分人が少ないけど、どうしてこっちにも避難させないんだ。」と言われま

す。本校の子どもたちの状況を説明し、数回のやり取りの後、何とか納得していただきましたが、今後このトラブルはもっと続くだろうな・・・と思い、すぐに管理職に報告。数か所に「医療的なケアの必要な人が避難しています」という貼り紙をしたことで、それを見ながら「大変ですね」と言われるようになり、ほっと一安心しました。その日の夜は、届けられた非常用毛布の入ったアルミの袋をひたすら破き続け、お年寄りと子どもを優先に配りました。次の記憶は、食事です。夕方になり、近くの指定避難所である城西小学校に食べ物が届いているから取りに来てほしい、という連絡が入りました。数人で取りに行くと、いつも交流でお世話になっている優しい先生がとても厳しい顔をして立っておられました。また、市役所の職員の方が、クレームが多くて交代もできないからずっと働きづめであること、パンは到底数が足りないから見られないよう新聞紙で覆って裏道を通って帰ってほしいといったことを話され、事態が深刻であることを実感しました。

避難所には当初、犬を連れて避難をされた方がたくさんいらっしゃいました。動物が苦手な私は雰囲気で行くのか、移動するたびにすべての犬にほえられてしまい、御迷惑をおかけしました。しかし、一緒に生活するとなると、恐怖感の方が先立ち、自分が一避難者としてここにいたら、とても居心地が悪かったらうなあと正直に思いました。また、癌を患っておられ、痛みや食欲不振を訴えられる方には、薬剤師さんを探し出して応急処置として薬の飲み方を教えていただいたり、流動食しか食べられない方にミキサー食を作って提供したり、痴漢行為に対応したり、朝意識不明で発見された方を救急搬送したりと、様々なことがありました。本校の立地している地区は、古くからある住宅地で、高齢者がたくさん避難していらっしゃいました。病気の方、高齢者の方、赤ちゃん連れのお母さんといった、社会的弱者といわれる人たちが安心して避難できるよう、また、動物を連れて人が安心して過ごせるよう、ニーズ別の避難所があるとよいなと感じました。

本校の児童生徒に話を移します。本校には前震後から常時10家族程度が避難されていましたが、比較的いろいろな物資はあり、一見困り感はない様子でした。しかし、長期化してくると、普段はミキサー食を胃瘻から注入している子どもが栄養剤の注入が続いたことにより体調を崩したり、ケア用品が不足したり、支援物資として送られてきたミネラルウォーターでは器具の洗浄が十分にできなかつたり、感染症を予防する加湿器には水道水しか利用できなかつたりなど、様々な問題が発生しました。そんな中、近所の方が「お宅の学校にはお粥しか食べられん子どもがおるど?」と言って、毎日お粥や雑炊を届けてくださったり、生活用水をタンクで運んできてくださる方など、たくさんの人に助けていただきました。また、被災者のニーズは時を追って変化していきます。初めは助かった安堵感と余震に対する恐怖感でいっぱいでしたが、そのうちに直面したのは、

- ①清拭だけでは体の清潔が保てない
- ②訓練を受けられないので、体が固くなってきている
- ③終日やることがないので反応が鈍くなってきている
- ④家に片付けに帰りたいけど子どもだけを残していけない
- ⑤特に被害が大きかった熊本市市民病院に通院している子どもたちが、慣れない避難

所生活で体調を崩し始めている

といった問題でした。①については、学校に訪問看護師の方に来ていただいて、学校の施設を使って洗髪・体洗いができた子どももいたこと、②については、後日、熊本県こども総合療育センターはその準備をしていたにもかかわらず、保護者にその情報が届いておらず、逆に一般の避難所には他県からボランティアPTが毎日来ていて、マッサージを受けられたケースがあったこと、③については、近隣の食堂がツイッターで呼びかけたところ、高校生ボランティアがたくさん集まったので、何かボランティアをさせてほしいと継続してきてくれるようになったため、本校に避難してきている子どもとその兄弟と一緒に遊んでくれるようお願いしたことで、子どもたちが生き生きとしてきたこと、④については、本校の児童生徒が普段利用している放課後等デイサービス事業所が、被災した職員が我が子を伴って出勤し、数日後には開所してくださったこと、また、相談支援専門員に困り感を訴えたことで、母親の相談に乗っていただいたケースもあったこと、⑤については、被災した市民病院の職員が市役所職員としてチームで巡回されている中に、地域連携室に在籍している職員がおられ、本校の子どもたちの困り感を訴えたところ、すぐに主治医と連絡を取っていただき、主治医が本校まで自転車で駆け付けてくださったことで、子どもたちと家族に安心が広がりました。特に医療面については、1週間もすると医師同士連携をとっていただき、支援物資を届けていただいたり、取り寄せていただいたりと、大変お世話になりました。ここでこんな支援が受けられる、こんな困り感がある等、もっと機関を超えて共有できていたらと思うこともありましたが、無事5月10日に学校を再開できたことは何よりでした。私は、避難所運営では、主に避難した御家庭の支援にあたりました。3食避難食を運ぶ中で、家族のプライバシーを守るよう努力しながらも異変がないか、困っていることはないか気を配ることで、いろんな思いを聞くことができたり、書ききれないほどの人たちとつながったりすることができました。

本震後は10日間、毎日16時間程度休みなく避難所運営にあたり、最終日は宿直もこなしたわけですが、その時は全く疲れを感じず、実を言うとあまり記憶もありません。もし、今度被災したら・・・その時のためにどう備えるか・・・考えていくことはもちろん重要ですが、想定できないことがあってもいろいろな人とつながりながらその時に尽くせるベストを尽くしていけば何とかかなるのかな、というのが今の一番の思いです。

熊本地震の記憶

中学部主事 西 友香

前震が来たとき、私はキッチンで夕食の片づけをしていた。目の前には食器棚。ひどい揺れのたびに、観音開きの扉が大きく開き、食器を吐き出す。ガチャガチャとコップが割れる音。とっさに後ろにいた母をかばった。母は次男のためにぜんざいをよそっていた。母の悲鳴。長男は風呂に入っていた。洗顔クリームを塗った間抜けな顔で慌てて風呂から出てきて家族の笑いを誘った。経験したことの無い揺れで、いろいろなものが倒れ、壊れはしたが、とりあえずみんな無事。前震のあとは少し冗談を言い合う余裕もあった。それから30時間も経たないうちに、あの本震が来るなどとは夢にも思わないで・・・。

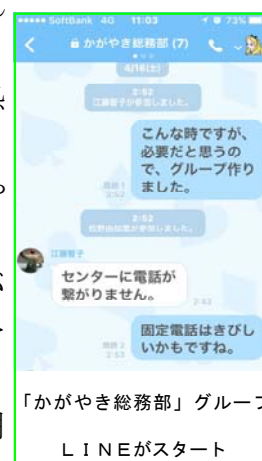
本震は、就寝しようとして立ち上がった瞬間だった。身体が横に飛び、何かに打ち付けられた。まっすぐ立てない。近くにあった机が前に倒れ、パソコンもプリンタもありえない場所まで飛んでいった。夫と息子たち、両親の無事を確認し、外へ出た。隣の家の天井が落ちている。隣人の名前を大きな声で呼び、人が家の中にいないことを知り、安堵。家族6人でとりあえず車の中に避難した。激しい揺れはその後も何度となく繰り返し、駐車場で過ごすのも怖いと感じ、近くの小学校に移動した。家族の誰もが無口になり、地震への恐怖にじっと耐えていた。

本震発生から90分が過ぎていたと思う。学校の様子、生徒や先生方の安否が気になるものの、家族を抱えて下手に動けない。こんな時はLINEが役に立つかもしれない。思い立って「かがやき総務部」のグループLINEをつくった。各学部等の状況を総務部で互いに情報交換しつつ、並行して「かがやき中学部」のLINEで中学部の生徒や先生方の状況把握に努めた。夜が明けるところまでには、中学部の生徒や先生方の安否確認が完了。

朝を迎え、この先どうしたらよいのだろうと途方に暮れた。小学校はいつの間にか避難所となり、人であふれかえっている。「足の不自由な父は、この避難所暮らしは無理だ。トイレすら使うことができないだろう」と感じた。家族6人、夫の実家を頼って、人吉へと向かった。高速道路は使えなかったが、何とか通行できる県道を通り、3時間以上をかけてたどり着いた。人吉は無事だった。そこにはいつもの日常があり、これまで目にしてきた地震の被害が本当に現実なのだろうかと思ってしまう。ここまで目にしてきた地震の被害が本当に現実なのだろうかと思ってしまう。

本震の翌日、私は家族を人吉の義父母に託して学校に向かった。人吉のディスカウントストアで車に積めるだけの水と米と食糧品を購入。亀裂の入った道路にハンドルを取られながら車を走らせるのは恐ろしく、「またここで大きな揺れが来たら？」という恐怖心と闘いながらの移動だったが、「災害支援」の文字を掲げた宮崎や鹿児島ナンバーの車列を見つけ、勇気もらった。「どうか力を貸してください」と何度も何度も手を合わせた。

学校に何とかたどり着いたとき、目に飛び込んできたものは見慣れない避難所の光景だった。事務室や校長室、職員室がなぜか避難所運営の本拠地となっている。数名の先生方で、数百人の避難者のお世話をしていた。実はそこからの記憶があまり無い。



やったことも聞いたこともない避難所の運営に、私もいつの間にか加わっていた。「食事準備班長」を任命され、避難所に身を寄せる人の3度3度の食事をどのように賄うか、学校に来ていた職員で話し合い、決め、実動していった。

城西小学校に駐在する陸上自衛隊からは炊き立てのご飯の提供。カップ麺やレトルト食品、缶詰等の支援食糧も届き始めた。

近所のお弁当屋さんや飲食店経営の方から「豚汁100食分くらい持ってきます。」「味噌汁ありますよ。」と毎日のようにありがたい申し出。

全国展開のカレーのチェーン店が「カレーを届けます。」とわざわざ名古屋から来て300食のカレーをふるまってくれた。

近くの農家さんが「もう売り物にはならんけん」と言ってトマトやキュウリをたくさん届けてくれた。

宮崎から有志数名が訪れ、「口蹄疫の時に助けてもらいましたから・・・」と、ありったけの有機野菜を使って、おいしい豚汁を心を込めて作ってくれた。

福岡から大勢で駆けつけ、バーベキューの炊き出しをしてくださったことも！口にはおぼったお肉のおいしさにふと涙が出そうになった。

北九州から来た方の「今、何がほしいですか？」との問いに「カセットコンロ」と答えたところ、北九州まで戻り、次の日渋滞の中何時間もかけて、カセットコンロを8台も届けてくれた。

「仕事が終わってからきました」と支援物資を届けてくれた福岡の若者。「明日も来ます」と笑い、車の中から手を振る姿に、人が人を思いやる気持ちの尊さを感じた。

人の善意とはなんとありがたいことか。そう感じて泣かない日は無かったと思う。そんな中で一番印象に残っているのは、この避難所のことを知った方が、イチゴのケーキをたくさん作って届けてくださった日。切り分けたケーキを小さい子どもから順番に、小学生、中学生・・・へと渡していったところ、その日、避難所に居てボランティアをしてくれていた高校生全員の分まで数が足り、高校生以下の子どもはみんなケーキを食べることができた。「神様はいるかもしれない」ふとそんな気持ちになった。

もちろん避難所の運営は全て順調というわけでもなかったし、避難所内には常に「いつもの生活ができない」という不安や不満が漂っていた。ちょっとしたことがきっかけとなりクレームとなって噴出しそうな空気もあった。特別支援教育に携わる者が比較的得意な「他者理解」「他者へのサポート」はこんな時に力を発揮するものだを知った。要支援の避難住民の状況をうまく聞き取り、必要なサポートを行う・・・このことがごく自然に行われていくのを目の当たりにして、避難所の運営を共にしていた先生方に尊敬の気持ちが湧いた。「この仕事に就いてよかった」と誇らしささえ覚えた。避難所運営が軌道に乗ったころ、朝早くから避難所を出て出勤する方のために、早朝の食事を準備するようになった。パンやおにぎり、魚肉ソーセージ、ビタミンが入った機能性飲料など・・・。玄関の近くに準備した朝食には「お疲れさま、行ってらっしゃい、大変だけど頑張りましょう」のメッセージがこもっていたと思う。

避難所の運営に没頭しながらも、気になるのは学校がいつ再開になるかということだった。避難者の皆さんが無事に帰宅するということが大前提ではあったが、学校の主役はやはりこの学校の子どもたち・・・新学期が始まってすぐの一番ウキウキする

楽しい時期に、登校できないことはどんなに寂しいことだろう……。そう思って、私は学校再開に当たっての道すじを考え始めた。

・・・相変わらず余震が続いている。学校が再開しても、大きな余震から身を守ることは最優先課題。2度の地震で学んだことは、大きな揺れが来たら収まるまでは、とにかく飛ばされないように自分の身体を支えるしかないということ。火の始末をするとか、退路を確保するためにドアを開けるとか言うが、まずその場から動くことが困難だ。授業中に大きな揺れに対応するとすれば、まずできる限り子どものそばを離れないでおくこと。横にいる子どもに覆いかぶさってでも怪我をさせないようにすること。座布団や頭を守るものが近くにあればいい。それをつかんで子どもの頭を守ろう。震度6強の揺れが2回襲ったのに、学校の校舎の外壁やガラスはほぼ無傷だった。ただ、教室内のあらゆる場所で物が落下したり飛んできたりはあった……。それで怪我をするのは怖い。備蓄食料は熊本地震の前から備えていたが、保護者から持たせてもらっていたものは2日分の食料であった。支援物資が届くまでに自分の備蓄食料が1日分でも長くあるとよい。食料は多めにしたい。これまでは温めずにそのまま食べられるものを持たせてもらっていた。今回の経験から、長引く状況で温かい食事がどれほど気持ちを和ませるのかを知った。カセットコンロと鍋があれば、レトルト食品もおいしく食べられる。カセットコンロを学校に常備しよう。非常用電源が使えるなら電子レンジでの調理も可能となる。ぜひ電子レンジを学部に1台備えよう。子どもの安全を守るため、朝の打合せでは支援体制を必ず確認しよう。マンツーマンの支援体制が難しくても、支援体制を学部の職員で共通理解しておくことはとても大事。余震が続く状況に備え、学部主事もできるだけ学部ホールにいるようにしよう。・・・

次々と今なすべきことが浮かんだので、「学校再開に向けて」という文書にまとめることにした。

学校再開のかじ取りは予想以上に難しく、困難な課題が山積していた。避難されている住民の方々の今後の生活はどうするのか。避難所運営の終了をだれがどのように決めていくのか。学校だけではどうにもならない問題を一つずつ、関係者と相談しながら解決に導くことはとても大変で、絡んだ糸を解くような作業だったに違いないが、管理職の先生方は根気強く対応に当たっておられた。しばらく自宅待機を余儀なくされていた職員も4月25日からは出勤できる状況となり、学習環境の復旧や避難生活を送る児童生徒の家庭訪問等を行う業務を担った。5月8日には避難所としての役割を全て終えた。

学校再開を5月10日と決めたものの、また課題が持ち上がった。いつも給食を提供してもらっている共同調理場から連絡があり、数日間は簡易給食しか提供できないということだった。簡易給食のメニューを見ると品数が少なく、児童生徒にとって食べづらいものもあったため、栄養面で不安を感じ、主菜を加えることにした。学校給食の食材を扱っている業者に直接掛け合い、湯煎にかければ食べられる食材「筑前煮」「肉団子」「照り焼きチキン」等を購入。職員が食材を湯煎にかけ、日頃から再調理を請け負っている業者にいつものように加工してもらおうことで、何とか児童生徒に提供することができた。

学校再開の日から、温かいおいしい食事を提供することにこだわったのは、「学校はいつも通りだよ。安心していいよ。」ということを見学生たちから感じてもらいたかったからである。登校した見学生たちの笑顔、給食をおいしそうに食べる姿から、逆に私たち職員が励ましをもらった。学校が日常を取り戻し、喜びと安堵感に包まれた日。きっと忘れない。

地震を振り返って

高等部主事 吉田浩幸

4月16日土曜日1時25分に本震の地震が熊本で発生。自分自身は東京にいたため、何も知らずに熟睡。夜中の3時ごろに、教頭から地震の連絡を受ける。高等部職員、生徒の安否確認を連絡網で回す。眠る暇もなく、職員、生徒の安否確認のやり取りを行う。朝の7時ごろには、職員、生徒の無事も確認できひと安心。この時ほど、ラインの有難さを感じたことはなかった。

テレビをつけると、熊本地震が全国ネットで放映中。東京で熊本のニュースを見るのは、不思議な感覚だった。

熊本空港が被災し、飛行機が欠航となったことを知る。福岡便の飛行機を手配し、帰ることにした。12:30発の飛行機だったが、いろいろなアクシデントが重なり、関西空港経由でやっと福岡についたのは19:30だった。そのため、福岡に宿泊し、月曜日に西鉄とJRを乗り継いで荒尾駅（荒尾駅より先は運休）に到着。ものすごい渋滞を抜けて、やっと自宅に戻った。幸い自宅は、ほとんど被害がなくひと安心。

火曜日から、臨時的に避難所になった学校に出勤。体育館、会議室、職員室廊下等、避難してきた人々であふれかえっていた。（700人程度）停電はしていなかったが、水道は止まっていた。トイレの水は、雨水をためて流す設備が整っていたので、地震後4日間は水を流すことができたが、今はバケツで流さないとダメになっていた。とりあえず、隣の小学校のプールからバケツリレーでトイレ用の水をタンクに溜めた。大変な重労働のため、雨水タンクからポンプを使って、トイレ用のタンクに水を溜めることにした。タンクからも、スイッチを押すとバケツに水が出るようにしたので、トイレを衛生的に保つことができた。

救援物資をもとに、避難者の食事の準備を行う。お湯を入れるだけで200食の炊き込みご飯ができる段ボール箱にはいったアルファ米を初めて作ってみた。簡単にできて、味も美味しかった。便利な物があるのだと、改めて感心した。

その後は、何回か学校に泊まったりして、避難所の運営を手伝う。夕食のおかずが無いときは、拠点となる物資配給所まで出かけ、支援物資を直接受けとったりした。自衛隊の方々がてきばきと動かれ、とても頼もしく感じた。

4月28日からは、避難所の運営が市の職員に引き継がれ、学校再開に向けての動きとなった。

今回の地震による被害は、大変なものだったが、避難所の手伝いをしていて感じたことは、自衛隊が頼もしい。支援物資は、すぐに集まる。みんな、何かしら人のために動こうとする。ということだった。



地震を振り返って

訪問教育主任 松野由加里

私の自宅は県北にあるため本震の際も揺れは大きかったが、自宅に被害はなかった。ただ、自宅は海岸近くで津波注意報が出ていたため、念のため高台に避難し、避難している車中で訪問教育の職員、児童生徒の安否確認を行った。全員と連絡がつき、とりあえず全員の無事が確認でき安心した。この地震による訪問教育の児童生徒の状況を記しておきたい。

<避難所への避難>

心疾患のため酸素療法等を行っているR児は、とりあえず家族で車に避難した。数日車中で過ごし、その後避難所となっている近所の中学校に避難し、畳スペースのある特別支援学級を家族で使えるよう配慮してもらった。5月の連休までそこで過ごし、その後被害はあまりなかった自宅に戻った。その間、業者による酸素濃縮機の手配や訪問看護師の訪問、R児の食物や衛生管理に必要な物品提供等R児を囲む人たちの協力が多く寄せられた。

<父親の職場への避難>

気管切開、酸素療法、経鼻経管栄養、夜間人工呼吸器使用等を行っているM児は、車中避難していたが、県北にある父親の職場で快く受け入れてもらえたため、家族で避難した。5月の連休まで避難生活を続けたが、入浴がなかなかできないM児のために避難先まで訪問入浴サービスの業者が来てくれ、清潔を保つことができた。

<車中避難>

酸素療法、経鼻経管栄養等を行っており、体調が不安定であったK児は、家族で車中避難の後、本校に1泊の避難をした。その後自宅の被害はほとんどなかったため、自宅に戻った。親戚やくまもと江津湖療育医療センターからの物資提供、地区の民生委員からの声かけもあり、何とか自宅での生活を再開した。

<県外避難>

常時人工呼吸器使用、胃ろうによる経管栄養等を行っているT児、Y児は、自力で熊大病院に避難入院した。数日後さらに重篤な患者の避難に備え九州内の他県の病院に避難してもらえないかという依頼を受け、T児はK大病院へ、Y児はM大病院へドクターヘリで移送された。T児はK大病院から直接帰宅したが、Y児は体調が安定しないため、熊大病院にドクターヘリで再入院した。

今回の地震が児童生徒に与えた影響は大きく、少しの余震でも気持ちが不安定になったり、緊張が強くなったりする様子が見られた。長引く余震で心身共に疲弊し、体調が悪化した生徒、保護者もいた。しかし、そのような状況の中でも児童生徒、その家族を囲む人たちの献身的な働きは家族を支え、立ち上がる大きな力になったと思う。現在もそれぞれの自宅には何があってもいいように、児童生徒の生活に必要な物品をスーツケースに詰めて準備されている。日頃の備えは大切であり、保護者のお守りとして心の支えとなっている部分も大きいと感じる。熊本地震を経験して思うのは、人と人のつながりがとても大切だということだ。人はやはり人のために動こうとするもの、助け合おうとするもの、人ってやっぱりすごいと痛感した。

熊本地震を振り返って

江津湖療育医療センター分教室主任 江藤智子

4月14日の前震時、私は山鹿の自宅にいた。これまでに経験したことのない地震に、思わず炬燵にもぐり込み、揺れが収まるのを待った。その後、すぐに分教室児童生徒、学部職員の安否確認を行った。児童生徒が生活している「くまもと江津湖療育医療センター」（以下：センター）には教頭が、学部職員には私が連絡を入れた。職員の中には自宅が被災し、続いて起きるあまりの揺れに避難している者も多かったが、児童生徒は全員の無事を確認できた。

学校は翌15日は休校となった。教頭から翌朝7時に分教室の建物の確認をして報告するようとの指示を受け、ほとんど眠れずに夜が続いているような状態のまま、自宅を5時過ぎに出発して分教室へ向かった。前震で高速道路が益城付近で陥没し、全面通行止めになっていると聞き、普段、植木熊本間を利用する高速道路は使わずに、3号線から北バイパス、57号線とつないで分教室までやってきた。時間が早いこともあって、その日はまだ渋滞もなく、6時半ごろには分教室へ到着した。間もなく到着した事務長と一緒に教室、職員室、倉庫、外回りの被害状況を確認した。教室内は花瓶が2つ倒れて水がこぼれていた程度であったが、職員室、倉庫はプリンターや電子レンジが床に落ちて破損、重戸棚も倒れて物品が散乱していた。建物の大きな被害はなかった。事務長は報告のため本校へ、私はその後出勤してきた職員と共に職員室や倉庫の片付けを行った。教室の被害はなかったため、月曜日からは普通に授業ができると考えていた。

山鹿はほとんど何も被害がなく、その晩は普段通りに就寝した。そして16日深夜の本震。全く予想もしておらず、ベッドから跳ね起きてすぐ横のテーブルの下にもぐり込んで揺れが収まるのを待った。しかし、なかなか収まらず、まだ揺れている中で家族の安否を確認した。センターには電話がつながらず、センターのスタッフに電話をかけて児童生徒の安否確認を行った。児童生徒は全員が無事であったが、センターは4月に開所したばかりの第3病棟のスプリンクラーが破損して水浸しになったり、余震や断水があったりしたため、体制が整うまではより安全なホールで生活し、他施設からの応援や全国各地からの支援物資等で乗り切ったと聞いている。分教室職員は自宅被害がかなりひどかった者もいたが、幸いに身体はみんな無事だとの確認が取れ、安心したところであった。

本震後の分教室の被害状況は1階教室やトイレは部屋の壁のクロスにひびが入っていたり、天井のエアコンがずれたりしていた程度であったが、2階倉庫は前日に元に戻っていた重戸棚が倒れてガラスが割れていたり、テレビが床に落ちて画面が破損していたりとひどいものであった。駆け付けた他の職員と一緒に、割れたガラス等、ある程度の片付けをした後は、再び揺れがくることを考えて倒れた重戸棚等はしばらくそのままにしておくことにした。

この後、しばらく職員は自宅待機となり、私は本



校での避難所運営に関わることになった。避難所運営については他で記されると思うのでここでは記述しない。毎日が大渋滞で、朝晩片道2、3時間程かかって出勤していたが、私の自宅はほとんど何も被害がなかったのが苦にはならなかった。疲れはあったと思うが気持ちが常に緊張している状態で、きつさを感じることはなかった。ただ、本校から自宅へ向かって行くにつれ、被災地から普段の生活へとだんだんと変わっていくのがとてもいたたまれないような感じがしていた。この間の記憶は避難所運営に関する事以外ほとんどないが、自宅と避難所を往復する途中で、他県からの避難物資を載せたトラックや給水車、救急隊員の姿等を見ると、よく涙があふれてしまっていたのを思い出す。友人からもたくさんの応援メッセージをもらった。本当にありがたかった。支援は現在も続いているが、本当に感謝している。

当時、熊本市内の学校は全て休校中だったため、センタースタッフの一部は子どもさんをセンター内に預けて出勤されていた。しかし、期間が長引くに連れ、場所の対応が難しくなり、センター側から分教室を使いたいとの依頼があった。そこで学校再開前の数日間、分教室をお貸しした。

学校再開日が決まった。再開前に職員で掃除をし、倒れた重戸棚等も元通りにした。センターの担当者からも建物の被害状況を確認していただいた。

始業式、入学式から間もない時期に休校となったため、新しいクラスでの活動も始まっていなかった。5月10日。学校再開。ここからが新学期の気持ちで頑張ろうと学校生活をスタートさせた。

熊本地震を振り返って

主任事務職員 津嶋ゆかり

4月14日(木)前震が発生した時、私は近所のスーパーで買い物をしていました。突然の大きな揺れに何が起こったのかわかりませんでした。脳裏に浮かんだのは家で留守番をしている3人の子ども達で、長女に電話をするけれども一向につながらず、家に帰り着くまでの5分間は生きた心地がしなかったのを今でもはっきり覚えています。自宅は本校から車で5分くらいのところにあり、裏が山だったため危険を感じ、「母ちゃんの学校に避難しよう」と子ども達を連れ、本校の駐車場に避難しました。本校は震度7にも耐えられる設計がされていますが、やはりガラスが多く使われている校舎の中に避難するのは怖かったからです。駐車場にいた時に近隣の住民の方から「ここは避難所ではないのですか？」と何度も言われ、その度に「申し訳ありません」としか言えず、近隣の小学校に行くようお願いをしていました。日付が変わった深夜、本校は臨時避難所として開設されました。

私達家族の他に数家族が車中泊をしていましたが、避難所を利用する方はいませんでした。翌日、校舎内外の点検や災害復旧などを終え夜遅くに帰宅しました。子ども達は自宅に帰るのは怖いと言って、本校の近くの実家に泊まりました。私だけが自宅に戻り、その夜は私と犬だけだったのです。前震のせいで一睡もできてなかったのも、こたつに入ったまま寝入っていました。泥のように眠っていた深夜、本震が発生しました。大きく横に揺さぶられながら貧弱なこたつの中にもぐり「このまま家につぶされて死ぬのかなあ」と思っていました。でも、子ども達のところに行かないと！と揺

れが収まった直後、着の身着のまま犬を抱えて家を飛び出しました。この時も電話が繋がらずLINEで実家にいる兄達に「かがやきの森に避難して！」と送り続けました。よく訓練などで行われている『落ち着いて行動を』とは程遠い行動だったと反省しています。

本校に向かう途中、もう1つ心配だったのが宿直している教頭先生の安否です。とにかく無事を祈りました。私は本震発生から10分後くらいに学校に到着したわけですが、子ども達もすでに到着しており、「2回も地震があったのにそばにいてごめん！」と抱き合いました。校舎の中に入ると、教頭先生が停電で真っ暗な廊下におられ、無事を確認し本当に安堵しました。ホッとしたのも束の間、「早く中に入れて！」と近隣の方が大勢詰め寄せ、パニックに近い状況の中、教頭先生と2人で避難者の誘導をし、そのまま目まぐるしい避難所の運営が始まったのです。

突然始まった避難所の運営の形ができるまで、事務室を本部として構えました。本震後、学校に駆けつけられた数名の職員で運営をしていくことになりました。私は電話対応、支援物資の受け入れ、設備やその他様々なトラブルの対処、情報収集に追われました。最初の3日間、近隣の小中学校や特別支援教育課、各ボランティア団体などから頻りに電話がかかってきて、物資や避難者の状況などを聞かれ、私は事務室から離れられない日が続きました。刻一刻と状況が変わる中で受け答えをしなければならず、「ちょっと待ってください」と言ってその度に校長先生や教頭先生を探しに行くような時間はありませんでしたので、あらかじめ正確な情報を常に把握しておく必要がありました。限られた人数で効率よく動くために、全ての情報を本部に集め、ホワイトボードに書き残しました。物資や食事の提供などの記録もすべて残すことで、最優先に手配してもらおう物資や今後不足していく物資などが必然的にわかるようになっていったのです。しかし、圧倒的に足りないのは人手でした。寝ることはもちろん、座って休むこともままならない、終わりが見えない状態でひたすら動いていました。本震から24時間が経過した深夜に校長先生と話し合いました。「私達だけでは限界です。避難者の中からボランティアを募りましょう。事情を話せばきっと理解を得ることができます」

翌朝、校内放送でボランティアをしてくださる方を募りました。多くの方が志願してくださいました。「ただじっと座って避難していても仕方なかもんね」と言ってくださり、本当に有難かったです。「あなたも私も被災者です」という気持ちが避難所の中に広がり、雰囲気も変わり始めました。私達家族は2週間くらい避難所で生活することになったのですが、私は避難所の運営に携わりながら、時々体育館にいる子ども達とご飯を食べたり休憩したりしていました。でも、なかなかそばにいてあげられることができず、母親としては本当に駄目だったと思います。小学校に入学したばかりでまだまだ甘えん坊の末娘は、時々「母ちゃん・・・」と事務室にやってきて、離れたがらないことも度々でした。「子どもと仕事、どちらが大事なの」と言われ、返す言葉もありませんでした。

地震発生から学校再開まで心身ともに本当に疲れました。一部の避難者からの心無い言葉に傷ついたり、子ども達のそばにすらいてあげられず、家族よりも仕事を優先させて母親としてどうなんだろうか、心が折れそうな時も多々ありました。私も家族

も被災者なのに、なんで避難所の運営なんかしているのだろうと何度も思いました。未だに、私はあの時あれでよかったのか、正しかったのかわかりません。

大変なことも多かった避難所運営ですが、一方で、避難者の方から励まされたり、各地から物資とともに寄せられる温かいメッセージにたくさん救われました。最近になって子ども達も「母ちゃんはその時全然そばにいてくれなかった。でも、かがやきに母ちゃんがいなかったら大変だったよね」と少し理解を示してくれるようになりました。ある方に、『人を助ければ自分も助かる』と言われました。まさにそうだと思います。今でも、近隣の方々から「あの時はお世話になりました」と声をかけてもらえ、頑張っただけよかったなと嬉しく思います。これを機に、これからも地域につながった学校であり続けるために、職員の一人、地域住民の一人として尽力していきたいと思えます。

3 生徒の作文

高等部3年（当時）堀泰成君の作文より

くまもとは こわれていません。
そっちは どうかな？

じしんは こわかった。
ぼくが したで ゆっくりしていると
がたがたって てんじょうが ゆれたね。
だいじょぶかなって おもった。
ちゃわんが われたくらいです。

おみずが っかいだけ とまったけど あとは なんもない。
おみずが ありがたいことが わかった。

いまは がっこうもあって
おみせは あいているのは HIひろせと ひかりのもりかな。

さんりぶくまなんは このまえ いったけど しゅうりしよらした。

これから おもしろいこと ないかなって さがしたいよ。
みんなもがんばってね。

4 報道関係資料

本校の児童生徒に関係の深い記事を2点転載。

在宅医療の必要な子どもたちにとって、熊本地震後、慣れない避難生活を強いられたことは大変深刻な問題であった。いつも利用している病院や福祉サービスが使えない状況の中、子どもたちは、家族はどのように過ごしたのか。記事は、その時の様子を生々しく伝え、災害時の子どもたちの命を守るためにどんな対応が必要か、問題提起している。

平成28年6月1日 熊日新聞朝刊掲載

熊本市民病院 母子医療の拠点

入院や手術「早期再建を」

保護者ら要望書提出へ

は医療的ケアが必要な子どもたちの保護者約30人、代表で同市東区の主婦石川真実さん(38)を出産した。未だちんは先天性の心臓疾患があり、2度目の手術を受ければ再手術が必要だと指摘する。(林田賢一郎)

熊本市北区の公務員。熊本市立立石も病院内入院する長女希望ちゃん(1)につきまら、どうすればいい。熊本市民が分らない」と石川さん。執刀医で小児心臓外科の深江宏治部長は「ほかの病室でも心臓手術ができるように対応している」と話した。渡邊さんは「熊本なら家族のサポートもついでに、2つが、熊本市民府からNICUの新生児室を受けたらいい」と話した。今後は九州全体で、熊本へ帰せたいという。佐藤さん(40)は「長男がいない。熊本での受け入れ体制の早期整備が必要だ」と指摘する。

熊本市北区の公務員。熊本市立立石も病院内入院する長女希望ちゃん(1)につきまら、どうすればいい。熊本市民が分らない」と石川さん。執刀医で小児心臓外科の深江宏治部長は「ほかの病室でも心臓手術ができるように対応している」と話した。渡邊さんは「熊本なら家族のサポートもついでに、2つが、熊本市民府からNICUの新生児室を受けたらいい」と話した。今後は九州全体で、熊本へ帰せたいという。佐藤さん(40)は「長男がいない。熊本での受け入れ体制の早期整備が必要だ」と指摘する。



おもちゃで遊ぶ石川真実さん(左前)と次男希望ちゃん(奥)は真実さん(雄一)は病室のため、帰郷の予定がないという。熊本市東区

福岡市立こども病院で入院が続く渡邊希望ちゃん(福)を囲む奈央さんと夫(福)岡市東区(渡邊さん提供)

熊本市北区の公務員。熊本市立立石も病院内入院する長女希望ちゃん(1)につきまら、どうすればいい。熊本市民が分らない」と石川さん。執刀医で小児心臓外科の深江宏治部長は「ほかの病室でも心臓手術ができるように対応している」と話した。渡邊さんは「熊本なら家族のサポートもついでに、2つが、熊本市民府からNICUの新生児室を受けたらいい」と話した。今後は九州全体で、熊本へ帰せたいという。佐藤さん(40)は「長男がいない。熊本での受け入れ体制の早期整備が必要だ」と指摘する。

総て、熊本市東区が地震による被災で入新生児医療や重症医療度医療を必要とする親子があふれ、熊本市が不安を募らせている。熊本市東区は「市民病院は、一刻も早い再建を求め、要望書を市に提出する。熊本市東区は、一刻も早い再建を求め、要望書を市に提出する。

熊本市東区は、一刻も早い再建を求め、要望書を市に提出する。

平成28年12月20日 熊日新聞朝刊掲載

NICU病棟 26日再開

熊本市民病院 来月には一般10床も

熊本地震大きな被害(NICU)病棟を、26日、新生児治療回復を受け、熊本市民病院に再開する。18日、新室(GCU)5床、NICU10床、NICUが、北館が使用受け入れがなくなり、NICU可能治療3床の準備が完了した。

熊本市東区は、患者のたに整備した病棟を報道NICUが、北館が使用受け入れがなくなり、NICU可能治療3床の準備が完了した。

熊本市東区は、患者のたに整備した病棟を報道NICUが、北館が使用受け入れがなくなり、NICU可能治療3床の準備が完了した。



26日に再開する熊本市民病院のNICU病棟。機器類を移動せ、改定18日、同市東区

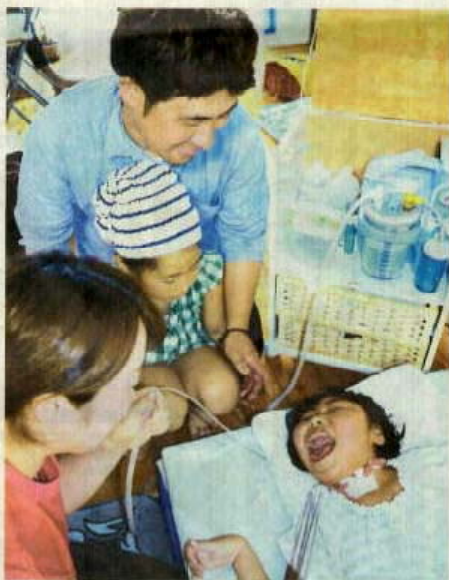
熊本市東区は、患者のたに整備した病棟を報道NICUが、北館が使用受け入れがなくなり、NICU可能治療3床の準備が完了した。

熊本市民病院は、熊本市民病院に再開する。18日、新室(GCU)5床、NICU10床、NICUが、北館が使用受け入れがなくなり、NICU可能治療3床の準備が完了した。

熊本市民病院は、熊本市民病院に再開する。18日、新室(GCU)5床、NICU10床、NICUが、北館が使用受け入れがなくなり、NICU可能治療3床の準備が完了した。



在宅療養児 災害時の支援



避難生活を乗り越え、今は自宅で看護師（左手前）から、たんの吸引などの医療的ケアを受ける夏千花さん（右）（熊本市西区で）

熊本地震から2か月。発生直後は、重度障害があり、在宅で人工呼吸などの医療的ケアを受けて暮らす子どもたちも避難生活を強いられた。災害時に子どもたちの命を守るためには、どんな対応が必要なのか。被災地で奮闘したNPO法人の経験から考える。

（二谷小百合）

「自宅に戻ってほっとした」。熊本市西区の西田あかりさん(45)は、安堵のため息をつく。長女の夏千花さん(8)は脳性まひ。胃に管で流し入れる「胃ろう」で栄養をとり、専用機器でのたんの吸引も必要だ。

4月16日の本震後、夏千花さんが通う特別支援学校へ避難した。余震の危険を感じたのと、断水したり水の濁りが続いたりしたため、吸引器具の洗浄などに衛生面の不安を感じたからだ。

避難生活中、普段からたんの吸引などを受けている

人工呼吸器、たん吸引：困難な避難生活

訪問看護ステーション「コスモ」の看護師中本さおりさんから、看護士を尋ねる連絡がスマートフォンにきた。ステーションは、熊本県合志市の認定NPO法人「NEXTSTEP」が運営し、県北部7市町村の子どもを訪問している。スタッフたちは、子どもたちと家族の安全を確認し、本震3日後には訪問看護を再開させていた。それを聞き、響子は安心して自宅に戻ることができた。

普段からの備え

連やかに子どもたちを支援できたのは、普段からの備えがあったからだ。同県には年々3回、台風が来る。ケアの継続、特に停電時に人工呼吸器などを使う子どもをどう守るかは重大で、子どもの安全を確保し、台風に先んじて入院させるなどの対策を講じてきた。

今回の地震でも、14日の前震後に中本さんから、電話が通じないなか、無料通話アプリ「LINE」で子どもの安全を確認。同日中に人工呼吸器を使ううい人を避難入院させた。本震後も、6人を素早く入院させている。「スタッフも親も訓練されているのと、ネットで早く安全確認できたのがよかった」と中本さん。

医療的ケアが必要な子どもが増えている

特別支援学校在籍者(注) 文部科学省調べ

年度	人数(人)
2006	6000
10	7000
15	8000

医療の進歩を背景に、人工呼吸や経管栄養などのケアを受けて自宅で暮らす子どもは増えている。文部科学省によると、特別支援学校の医療的ケアが必要な児童生徒は、2006年度の5901人から、15年度は8143人に増加。うち5

935人が通学生、1180人が家庭への訪問教育だ。

こうした傾向のなかで起きたのが2011年の東日本大震災。多くの子どもが、避難生活で困難に直面した。

被災地で人工呼吸器を使う子どもにも酸素ボンベを届け続ける、在宅医療機器提供会社「アラフィ」（仙台市青葉区）取締役の武山裕一さんは「機械の音を気にして避難所に行けなかったり、入院を断られたりして自宅で過ごしていた子どもも多かった」と話す。

その教訓から、災害時に子どもたちを守る取り組みが各地で始まっている。

横浜市の「在宅療養児の地域生活を支えるネットワーク」は今年2月、在宅療養児のための防災文化祭を開いた。医療的ケアを受ける子どもが地域にいることを知ってもらい、住民からのサポートにつなげる試みだ。千葉県八千代市の八千代小児在宅医療研究会「チームやちよキッズ」は、医療機器の電源確保の仕方などを冊子にまとめ、今後は各家庭との連携も深める考えだ。

障害のある子どもと家族の支援に詳しい神戸大の高田哲教授は、「在宅で医療を受ける子どもたちを、災害時の要援護者として普段から地域で把握し、個々の状態に合わせた援助が素早く行えるよう備える必要がある」と指摘している。

Ⅲ 熊本地震に学んだこと

1 熊本地震を経て見えてきたこと

今回の地震で見えてきた課題は次の3点である。

- 緊急連絡手段等の課題
- 備品・備蓄物資の課題
- 避難所としての課題

それぞれの課題について、解決の方向性も含めつつ、次に述べる。

(1) 緊急連絡手段等の課題

固定電話が不通となったため、携帯メール、LINE、LINE電話で対応した。特に、LINE電話は確実につながり、児童生徒・職員の安否や避難状況を把握する際に有効だった。これまで学校からの連絡は、連絡網を利用したり、学部主事等からの連絡を担当が電話やメールで各家庭に伝えたりといった方法を取ることが多かったが、中には、いつまでも連絡が取れないケースがあり、緊急時に確実に伝達できる連絡手段を確保することの大切さを痛感した。その解決の一助になるのではと考え、熊本地震後に、学校安心メールの導入を行うことを決め、学校からの連絡を一斉に保護者や職員に伝達する方法を取るようにした。今後、学校安心メールにて第一報を伝えた後に、担当が確認の連絡を入れるなどして、複数の連絡手段のルートを確保しておきたい。

また、緊急時は災害用伝言ダイヤルの利用が有効であるという話を聞いていても、実際に利用した経験が無いため、活用ができないのではないかと懸念がある。保護者も交えて災害用伝言ダイヤル体験利用を行うなどして、備えておきたい。

子どもの引き渡し方法などについては、今回の規模の地震が起きた場合、全員を速やかに保護者へ引き渡すことは、災害の規模や道路状況から考えると難しい場合もあると考える。保護者以外の人が見守りや引き取りに来ることも想定し、「児童生徒 緊急時連絡・引き渡しカード」を使った引き渡し方法を決め、実際に確認しておきたい。

(2) 備品・備蓄物資の課題

熊本地震発災以前にも、本校に通学する児童生徒については、各家庭に依頼して2日分の水・食料・薬等の備蓄物資の準備を行っていたため、学校に児童生徒が避難してきた際には大変役に立った。とは言え、大規模災害の場合は量的にも質的にも不十分であることが分かり、現在は、3日分の備蓄（水、食料、薬、オムツ、着替え、ケア用品等）と身を守る道具（クッション等）や毛布、マット等を各家庭で用意してもらっている。

また、学校としても熊本市や支援団体の協力を得て、長期保存できる水や非常食、紙皿等の器、ウェットシート、医療的ケアに必要な物品等を多少備蓄しているものの、熊本地震の経験をもとに考えると、さらなる備蓄が必要と思われる。在校生家族が多数避難して来ても対応できるよう、どのように整えていくのか、継続して検討していきたい。

(3) 避難所としての課題

避難所運営の経緯はこれまでに繰り返し述べたが、未曾有の大災害であったため、避難所運営に当たる自治体から、本校への担当者派遣や支援物資の提供がかなり遅

れた。自治体職員が派遣されるまでの10日間は、避難所運営の全てを限られた本校職員（運営委員）で行わざるを得なかった。

避難所として学校を開放する場合、避難所運営は誰が主体的に行うのかを事前に自治体と確認しておくことが必要だったと思うが、避難所としての指定がなくとも、学校が避難所となり得ることを認識しておくべきであり、危機管理マニュアルをきちんと整備しておく必要があった。

今後は授業時間中に被災し、児童生徒が学校にいる場合に避難所要請を受け入れるのか、受け入れる場合は、どのように避難者を受け入れるのかを具体的にイメージして、危機管理マニュアルの中に盛り込んでおきたい。

(4) その他の課題

児童生徒が自宅で被災した場合に、保護者が避難場所を事前に把握しておらず避難場所に困ったり、病院が被災して受け入れてもらえなかったりといったケースがあった。災害発生時における地域の施設等避難所の把握を行うとともに、複数の受入先を確保しておくよう、促している。

また、学校に児童生徒がいる時間に大災害が発災し、帰宅困難となった場合に、医療的ケアが必要な児童生徒は誰がケアを行うのかということも考えなくてはならない問題である。看護師がいる場合については、非常時を理由に看護師に協力を得ることも考えるが、看護師不在となった場合の医療的ケアの実施については、誰が行えるのかという問題が残る。予め関係機関と連携を図っておくことが必要である。

最後に、今回の熊本地震では、障がい者が安心して避難できる避難所が無く、大変困ったという声があったと聞く。本校の施設設備の状況を考えると、福祉避難所としての機能は十分に備わっていると考える。災害発生時に、地域で暮らす障がい者が安心して身を寄せることができる場所として、どのようにそのよさを発揮していくのかということについては、平成29年度からスタートする「防災型コミュニティスクール」の導入にあたり、地域防災や避難所運営の事項において、取り組んでいきたい。

2 今後の取組として（案）

(1) 地震等の災害発生を想定した避難所運営等について

平成28年熊本地震において、本校は近隣住民約700人（駐車場での車中泊を含まず）及び本校在籍児童生徒とその家族他約60人を避難者として受け入れた。また、本震直後から約10日間、本校職員が中心となって避難所運営を行った。このたびの避難所運営の経験を振り返り、今後の災害時における避難所運営等について、以下のように思慮している。

ア 大規模地震発生時に想定される状況

熊本地震においては、本校が強度の地震に対しても耐えうる施設であることが、広く知れ渡ることとなった。再び、大災害が起きた場合には前回の規模を上回る相当数の避難者が本校に押し寄せてくることが考えられる。

イ 初期対応について

(ア) 安否・被害状況等の確認

授業中或いは下校後を問わず、担任による児童生徒の安否確認を最優先に行うものとする。また、家庭や周辺の被災状況等についても速やかに情報収集を図り、集約する。

(イ) 校舎内外の施設設備の安全確認

児童生徒の安否確認と並行して校舎内外の施設設備の安全点検・確認を行う。

(ウ) 県教育委員会への連絡

児童生徒の安否確認の状況、施設の被災状況、避難者の受け入れの可否等について報告・相談を行う。

避難者の受け入れにあたっては、校舎内外施設の安全確認ののち、県教育委員会関係各課（特別支援教育課、施設課、学校人事課、体育保健課等）への連絡を行い、臨時に避難者を受け入れる。ただし、状況によっては、県教委の判断を待たず、学校現場での判断により避難者を受け入れざるを得ない状況が生じられると思われる。

ウ 避難者の受け入れ態勢について

(ア) 受け入れについて

受け入れの対象については、いくつかの重要検討事項の1つである。避難所運営の際には、多くの方々から本校を一般の避難者に開放したことに対する感謝の声が多く聞かれた。特に、近隣は高齢の方々が多い地域であり、今後大規模災害が起きた場合には直ぐにでも本校に駆け込みたいという気持ちを持っておられる方が多い。地域に開かれた学校を目指している本校にあっては、地震等の非常時に近隣住民を可能な限り受け入れることは、責務であると考えられる。

また、本校在籍の児童生徒及びその家族については、本校への避難の希望があれば、積極的に受け入れることは当然である。その他、障がいのある他の特別支援学校の児童生徒や卒業生等については、本校内で提供できる避難場所がかなり限られる。基本的には可能な範囲で受け入れることになると思われる。

(イ) 受け入れ対象

- 近隣住民
- 本校児童生徒及びその家族
- 本校職員
- その他（特別支援学校の児童生徒、卒業生等）

(ウ) 受け入れ場所

受け入れ場所については、以下の①～③を想定し、一般避難者と本校児童生徒の避難場所のエリア分けを明確にしておくことが重要である。

- ① 避難所運営が長期化するかもしれないこと。
- ② 避難所縮小に向けて動き出すべき時期が来ること。
- ③ 一方で学校再開に向けた取組も進めていく必要があること。

なお、状況によっては避難所を維持したまま学校を再開し、一方では避難所運営にも気を配りながら、また一方では教育活動も同時に展開しているという状況もあり得るということもイメージしておく必要がある。そのような意味合

いから、本校では以下のように避難者の受け入れ場所として考えていきたい。

- 地域住民：体育館、会議室、管理棟前廊下、その他管理棟側諸室
- 本校児童生徒及びその家族：教室棟
- 本校職員職員室：職員室
- その他：教室棟（保護者控室、個別学習室、制作学習室）

エ 職員による避難所運営について

避難所としての指定の有無にかかわらず、学校は何らかの形で運営に携わざるを得ないであろう。現時点で、4月の熊本地震時と同じような状況に陥った場合、当面は学校職員が中心となった避難所運営の体制をとることが現実的な対応だと思われる。しかしながら、職員とその家族も被災者であることから、避難所運営に携わることが可能な職員の意思を尊重することが肝要である。

実際には、管理職を中心にして、学校に来ることができる職員で役割分担をしながら避難所運営にあたっていかねばならないであろう。

オ 備蓄について

本校児童生徒及び職員分の食糧、水、日用品については最低3日分の備蓄が有効であることが今回の地震時対応で明らかになった。一般の避難者分の備蓄に関しては、大人数の本校への避難が予測されるため、備蓄品の保管場所、購入予算等についても現状では対応困難である。再度、非常事態に陥った場合には、今回の地震時対応と同じ状況になることが想像される。



バッグやリュックの中に3日分の備蓄(水、食料、薬、オムツ、着替え、ケア用品等)が入っている。学部ホールの持ち出しやすい場所に置いている。



医療的ケアの必要な児童生徒の備蓄バックの中身。経腸栄養剤や薬、シリンジ、Yガーゼ、マーゲンチューブ等、ケアに必要なものが一式入っている。

(2) 熊本地震後の学校としての取組

ア 連絡体制の再整備

(ア) 「学校安心メール」の導入

本校教職員の意見聴取後、総務会、PTA執行部会による検討を経て、平成28年度2学期からの導入に至っている。「学校安心メール」を活用した職員向け緊急連絡訓練の実施を計画中である。

- (イ) 引き渡しカードの作成
- (ウ) 新入生等を含む連絡先一覧の作成
- (エ) 通学生の避難経路及び避難手段の確認
- (オ) 居住地地図・路線図及びハザードマップの作成

イ 備蓄の充実

- (ア) 児童生徒用
 - ・ 2日分の備蓄を3日分に増量
 - ・ 医療器具の購入
 - ・ 備蓄物資一覧表の作成

- (イ) 職員用

- ・ 非常用持ち出し袋の購入、配付
- ・ ヘルメット、防災用品の配備

ウ 災害時緊急対応マニュアルの見直し

総務部を中心にマニュアルを随時見直し中

エ 児童生徒、保護者、職員の心のケア

- (ア) 日常の様子を観察や保護者とのコミュニケーションの充実
- (イ) 職員のストレスチェックをもとにした心的ケアの実施
- (ウ) 状況に応じた研修会等の実施

本校児童生徒は意思の表出が困難なことが多いため、担任等が日常の状態をしっかりと把握し、体調変化や細かな動き等を読み取る力を備えておくことが大切である。

教職員のメンタルヘルスに関しては、個別面談やストレスチェック、研修等を取り入れたり、日頃の教職員間の声掛けと見取りを心掛けたりしていきたい。

オ 防災型コミュニティ・スクールの導入

熊本県では、平成29年度から全ての県立学校をコミュニティ・スクールに指定し、各校に運営協議会を設置し、地域防災や避難所運営、防災教育に関する事項を中心に、連携・協力体制の構築を進めている。今後、管理職、防災主任及び関係分掌部（学校生活部）が中心となって、諸計画や各種マニュアルの整備等を進めていく。

3 寄稿文「災害時の地域連携『熊本地震』における避難所運営をとおして」

熊本県立熊本かがやきの森支援学校 校長 五瀬 浩

※この文章は、社会福祉法人日本肢体不自由児協会発行「障害児・者を育てるみなさんの情報誌 はげみNo.373」に掲載されたものです。

はじめに

熊本県立熊本かがやきの森支援学校（以下、本校）は、重度重複障がいのある子ども達の安全・安心な教育環境の提供と子ども一人一人の持てる力を精一杯伸ばすことを目的として開設された肢体不自由特別支援学校です。平成26年4月に熊本県立熊本支援学校（知的障がい特別支援学校）内に開校し、同年12月に現在地へ新築移転し、今日に至っています。本校舎及び江津湖療育医療センター分教室を有しており、在籍児童生徒数は66名（平成29年3月現在）です。



写真1 正門から望む本校校舎

本校舎は、熊本城を望むことができる熊本市の西方に位置し、近隣には熊本市立城西小学校、西山中学校、千原台高等学校などが立地する文教地区にあります。

本校教育目標を達成すべく、ハード・ソフト両面での安全・安心な教育環境整備と教育の充実を目指して日々取り組んでいるところです。

そのような中、平成28年4月、あの「熊本地震」が起きました。避難所指定はされていない本校ですが、震災直後から多くの地域住民が避難してこられたことから、教職員による避難所運営を余儀なくされました。

ここでは、避難所運営をとおして経験したことやそこから感じたこと、今後の対応等について「連携」という視点から紹介します。

1 本震発生まで

(1) 前震から避難所開設まで

前震（4月14日 午後9時26分）後に校舎内外の被害状況を点検した結果、建物自体には被害がなく、また、教室の棚や机の上の物が落ちた程度でした。翌日、県教育委員会からの依頼により、本校を臨時避難場所として開設し、在校生家族6人の避難を受け入れました。その時点で地域住民の避難者はいませんでした。週末に差しかかっていましたので、休日間の宿直を含む輪番体制を整え、管理職及び事務職員で以降避難してこられる方への対応に備えることとしました。しかし、この時点では後の本震に襲われることを誰も予想していませんでした。

(2) 本震発生

輪番により、教頭一人が事務室に宿直していた深夜、本震（4月16日 午前1時25分）が発生しました。校舎内の重戸棚や金庫が倒れたり、さまざまな物

が散乱したりといった状況で、明らかに前震よりも強い揺れに襲われたことが分かりました。

本震直後から近隣住民は、市指定の城西小学校へ避難されたのは当然ですが、本校へも続々と避難者が押し寄せてこられました。また、津波警報が発令されたこともあって、高台に位置している本校へ駆けつけてこられる避難者も多くおられました。校内の駐車場はあっという間に満杯になり、避難者数は受付名簿上、約700名にのぼりました。

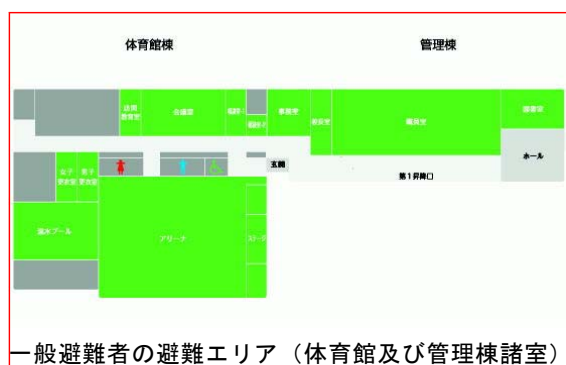
2 避難所運営の実際

(1) 児童生徒の避難状況

全児童生徒の約8割が避難生活を送ることになり、そのうちの14家族約60人を本校で受け入れました。全家庭に学校への避難を呼びかけたにもかかわらず、学校に避難された数とその程度にとどまったのは、震災による悪化した道路状況や親の仕事場所との地理関係、また他の兄弟がいること等が主な理由でした。また、一時的に本校以外の小中学校等へ避難されたり、県内外の医療機関に避難入院されたり、車中泊をされた家族もありました。大規模災害が起きた時の緊急避難場所については、各家庭でも日頃から確認しておくと同時に、子どもそれぞれの状態に応じて備蓄品等の備えをしておくことの必要性を再認識しました。

今回本校での避難所運営において、一般避難者の避難場所と本校在校生等の避難場所のエリア分け(図1)を徹底し、玄関を別々にしたことは有効なことでした。一般避難者からは「スペース的に余裕のある教室棟も開放してほしい」との要望がありましたが、本校在校生等が避難していることや障がいの状況を説明したことで、エリア分けについての理解を得ることができました。本校に避難している児童生徒には、家族単位で教室を充てたため、余裕を持って生活することができ、プライバシーにも配慮することができました。さらに、学校開設当初から各児童生徒2日分の非常時備蓄(現在は3日分を備蓄)をしていましたので、初期の避難所生活を送るうえで多大な効果を発揮しました。

図1 避難者のエリア分け



しかしながら、次のように課題と感ずることもありました。

1つの事例として、普段、普通食をミキサーにかけて注入している子どもが、避難所生活中にラコール（経管栄養剤）の注入のみとなってしまったことで下痢をしてしまい、お風呂にも入れずお尻がただれてしまったことがありました。このことについては、学校近隣の食堂経営の方がおかゆを持ってきてくださり、学校でミキサー食として提供できるようになったことで症状も治まりました。このおかゆの提供は、約10日間ほど続けられました。

その他、医療的ケアが必要な児童生徒について、避難所生活中に必要なケア用品が不足する場面が生じました。幸い、他の児童生徒のケア用品を借用することで急場を凌ぐことはできましたが、今後の備蓄の内容（種類・分量）を考えるうえで参考となることでした。また、医療的ケアを必要とする子どもが本校に避難しているという情報を得られた医師が、道路事情が悪く、しかも余震が頻繁に起こっている状況の中、自ら自転車に乗って医療器具を届けてくださったことには涙の出る思いがしました。

熊本地震は余震、本震ともに夜間の発生でしたが、児童生徒が学校に居る昼間に同じような災害が起こることを想像すると、様々な対応策を検討しなければなりません。要検討事項としては、保護者や家庭との連絡手段や児童生徒の引き渡しの方法等が挙げられます。平常時には支障なく使える電話やメールですが、地震発生後は通じにくい状況が度々ありました。そのような状況下にあっても、「ネット回線による通話やメールは支障なく使えた」との声を多く聞くことができました。今後の対応策を考える際の参考になると思われます。その後本校では「安全安心メール」を導入し、現在緊急連絡手段として活用しています。また、児童生徒の引き渡しについては、その方法と連絡カードの見直しを図っているところです。また、学校ホームページを用いた情報発信や連絡についても、保護者のみならず教職員その他へ広く発信できる有効な手段として活用したいと考えています。

（2）一般避難者への対応

本震直後から不特定多数の避難者が本校へ押し寄せてこられました。避難所運営初動時には、職員2名～3名で避難者を体育館及び管理棟前廊下に誘導しましたが、どっと押し寄せてくる避難者の中にはペット連れの方も多くおられました。このことは、後の避難所運営や学校再開を進めるうえでの課題となりました。さらに、避難者の中には高齢の方、精神疾患のある方、妊婦の方、その他特別な配慮が必要な方などが多数おられました。医療や福祉機関とのやりとりも本校職員が行いながら、その場で



写真2 避難場所となった体育館内の様子

迅速かつ適切な判断を要求される場面もたびたびありました。



写真3 避難場所となった管理棟廊下の様子

本校は、避難所指定を受けていないことで、支援物資が直接届かなかつたり、自治体からの人的派遣が発災後約十日間無かつたりといった状況下にあったため、本校職員が中心となって水や食糧の調達をはじめ、食事準備・提供、その他諸々のニーズへの対応に当たりました。他の多くの避難所では、避難期間が長くなってくると、避難者による自治組織を立ち上げて自主運営に移行していました。しかし、校内の限られたスペース

（職員室内）で支援物資の保管や食事準備を行わざるを得なかったため、児童生徒の個人情報保護の点に考慮し、職員を中心とした避難所運営を行いました。

3 学校再開に向けた連携の実際

スムーズな避難所運営を心がけることと同時に、学校再開に向けた動きも必要になってきます。教育委員会との連携は言うまでもありませんが、その他欠かせないのが、地域（自治体、自治会、近隣校、関係機関等）との連携です。今回の避難所対応をとおして実際にとった連携について紹介します。

(1) 水、食料の調達

支援物資や給水は、臨時避難場所である本校には直接届かず、近隣の城西小学校や西山中学校に届けられていました。そこで、城西小や西山中と避難所状況について、校長同士で常時連絡を取り合いながら、給水車到着予定の時刻や自衛隊による炊き出し情報を知らせてもらったり、本校避難者分の物資調達の相談をさせてもらったりしました。

非常時にお互いの状況を思いやりながら、共助していこうとする周囲の方々の思いを感じ、感謝の念を抱くとともに、強く励まされ勇気が湧いてくる思いがしました。

(2) 避難所の縮小・収束に向けて

避難所開設十日目頃から自治体（熊本市）職員に避難所運営を引き継ぎ、本校職員は学校再開に向けた準備を行うことができるようになりました。学校再開に向けて大きく動き出すきっかけとなったのは、兵庫県からの震災・学校支援チーム「EARTH」派遣による支援でした。本校が避難所運営に追われている中、自治体をはじめとする関係各所との連携役となっただけでなく、事態を好転させる契機となりました。

ライフラインの復旧に伴い、避難者の数は次第に減っていきましたが、余震が頻回に続いていたこともあり、特に高齢の方や一人暮らしの方、その他特別な配慮が必要な方々は学校再開直前まで本校で過ごしておられました。その間、他の

避難所紹介や学校再開の説明等の役を担っていただいたのは、近隣校のPTA会長や自治会長、そして自治体職員の方々でした。

様々な方々の支援と協力のおかげで、本校は地域住民に感謝されつつ、学校再開にたどりつくことができました。

地震発生は校長として赴任し僅か二週間後のことでしたが、既に近隣自治会長や学校長との顔合わせを行っており、心やすく相談できる関係ができていたことは幸いでした。

4 連携・協力体制の構築に向けて

(1) 医療機関との連携

大規模災害時には全ての人々が被災者になります。授業中は医療的ケア実施のための看護師が配置されていますが、災害時に看護師不在となった場合の医療的ケアを誰が担うのか、体調急変時の対応や道路状況の悪化によるドクターヘリでの搬送などを想定し、医療機関との連携・協力体制を整えていく必要があると考えています。

(2) 自治体との連携

学校が避難所となった場合は、基本的には市町村の防災担当部局等が責任者となり、運営されることとなります。しかしながら、避難所運営の初動においては教職員による運営は十分あり得ると想像できます。そのような場合に重要なことは、「いかにスムーズにそれぞれの自治体防災部局等に引き継ぐか」ということです。このたびの本校での避難所運営において、自治体との事前の連携・協力体制が整っていなかったことが最も課題となったところです。このことを教訓として今後の備えを整えていかねばと痛感しています。

現在、本県ではすべての県立学校を防災型コミュニティスクールに指定し、地域との連携を進めながら防災機能を高めていこうとする取組が進められています。

本校においても、避難所となった場合の学校施設の利用対象者、提供可能施設設備、運営主体、非常用物資等の備蓄の在り方などについて、自治体をはじめ近隣自治会、関連機関との協議の場を設け、情報を共有する仕組みづくりに取り組みたいと思っています。

(3) 自治会、警察、消防との連携

地元自治会との合同避難訓練や炊き出し訓練、電話やトランシーバーによる連携訓練等の実施について協議していく必要があるでしょう。また、災害時の一般避難者と本校児童生徒及びその家族との避難エリアの住み分け等についても、事前に協議・確認しておく必要性を感じています。

警察や消防とは、これまでも火災避難訓練の実施や学校周辺の安全環境管理、さらには必要に応じて防災防犯に係る研修への協力について連携しています。今後、災害時における連携・協力体制について、前述の様々な関係機関との総合的な会議の場を設定することを検討していきたいと考えています。

おわりに

熊本地震における避難所運営の経験をとおして気づいた事柄を中心に紹介しましたが、災害時における連携や備えについては、他にもまだ多くの課題があると思います。また、各学校や地域の実情によっても異なる課題があることでしょう。

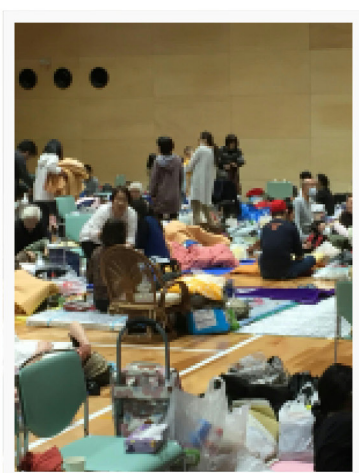
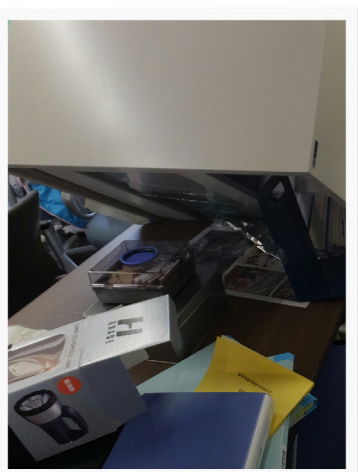
大地震を経験する前までは、「大きな地震が起きても熊本は大丈夫…」といった風潮があったことは否めません。このたびの熊本地震を経験して、大規模災害は日本中どこにでも起こり得るということ、そして、避難所指定の有無に関わらず、どの学校であっても災害時には避難所になり得ることを痛いほど思い知らされました。

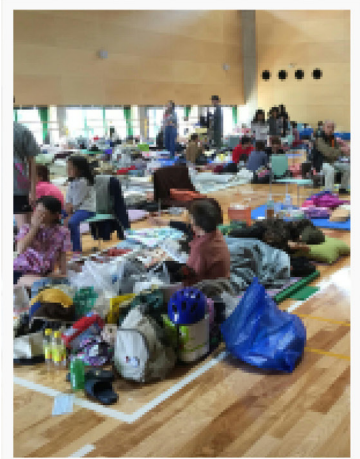
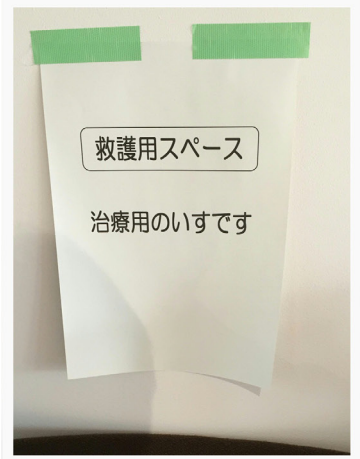
辛く、苦しく、悲しいことも沢山ありましたが、全国からの励ましに勇気づけられたり、人と人の絆の有り難さを感じたりしながら、日常を取り戻して参りました。今後、本校としても熊本地震の経験をもとに、危機管理マニュアルの見直しをはじめ、過去の事例を教訓にしながら、より安全・安心な教育環境整備に向けての取組を進めていきたいと考えています。

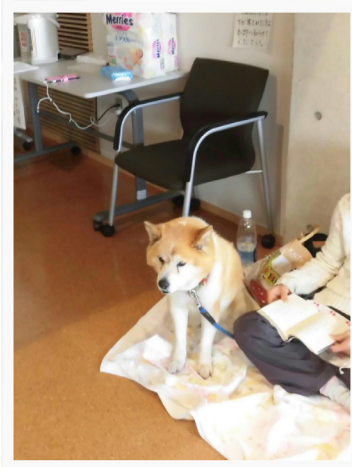
最後になりますが、熊本地震に際しまして全国の皆様方から多くの励ましの声や御支援をいただきましたことに、あらためて感謝とお礼を申し上げ、結びいたします。

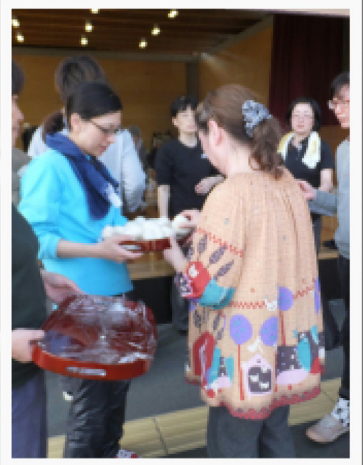
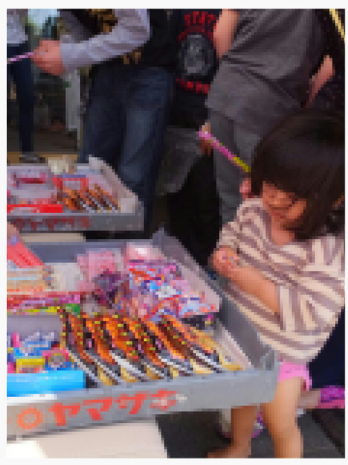
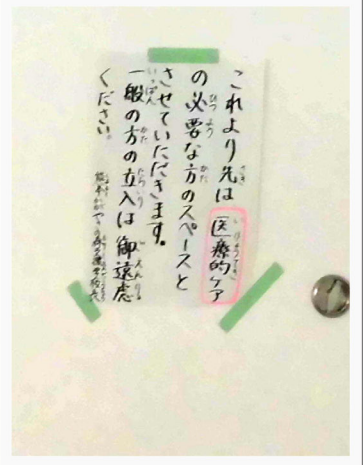
IV 關係資料

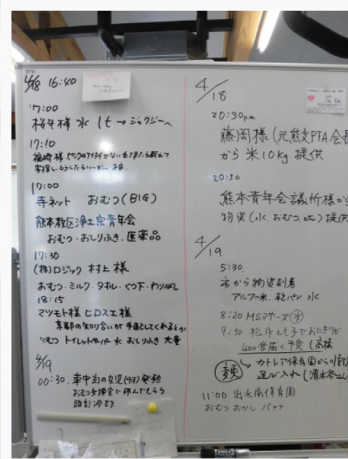
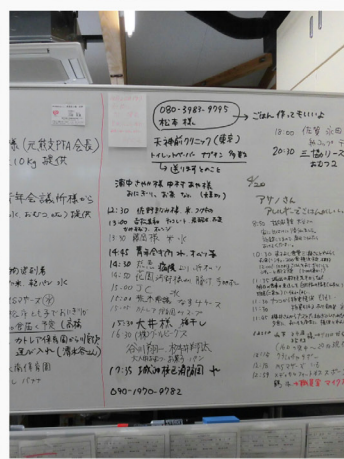
1 写真で見る熊本地震の記録

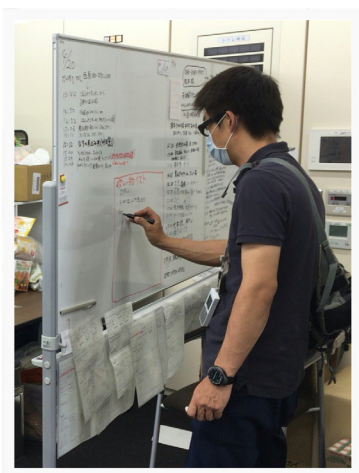
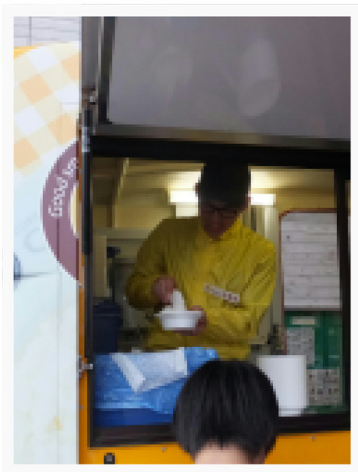


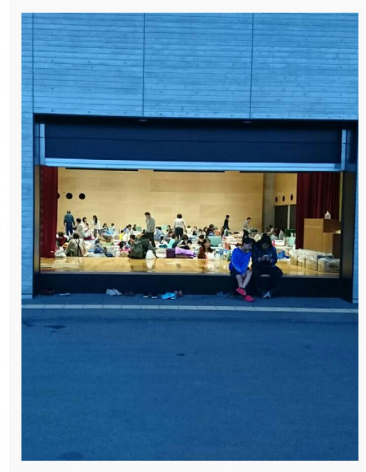


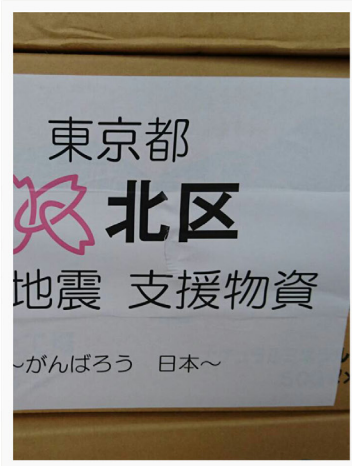












2 日建設計より提供「被害状況報告書」

2016年熊本地震

熊本県立熊本かがやきの森支援学校
被害状況調査報告書



2016.04.28



4月25日 体育館・プール棟, 管理棟



4月25日 教室棟

(1) 調査日時

2016年4月25日(月) 12:00～15:50

(2) 調査者

株式会社日建設計

エンジニアリング部門	構造設計グループ	構造設計部	部長	田代靖彦
同上			主管	加登美喜子
設計部門	設計部		主管	高木研作

(同行：熊本県立熊本かがやきの森支援学校：上村氏)

(3) 熊本地震概要(測定点：熊本市西区春日において震度5弱以上) 気象庁HPより

2016年4月14日 21時26分	震央:熊本県熊本地方	M6.5	震度6弱
2016年4月14日 22時07分	震央:熊本県熊本地方	M5.8	震度5弱
2016年4月15日 00時03分	震央:熊本県熊本地方	M6.4	震度5強
2016年4月16日 01時25分	震央:熊本県熊本地方	M7.3	震度6強
2016年4月16日 01時45分	震央:熊本県熊本地方	M5.9	震度5弱

(4) 総合所見

各建物内外各所を構造安全性および耐久性の観点から下記に記載する範囲を目視確認した結果、各棟共に柱の立ちは正常で、傾斜は殆どみられない。木造、RC造、S造各部分ともに、全体構造に関わる有害な損傷は認められない。基本的に継続使用に当たっても構造安全上の問題はないと判断される。

木部材各所に材軸方向割が生じているものがあるが、視認の範囲では全て地震起因でない木造としての乾燥収縮による現象である。構造安全上の問題はないと判断される。

木造部分は原則引きボルトにて接合されており、経年変化による木痩せおよび地震による変形によるボルトの緩みが発生している可能性がある。緊急性はないが、全体的にボルトを締め直す等の措置が望まれる。

(5) 各棟調査結果概要

(5-1) 体育館・プール棟：RC造+木造、場所打ちコンクリート杭地業

◆会議室範囲

- ・各方向共に柱の傾斜は認められない。
- ・木部材、接合部共に、特に有害な損傷は認められない。
- ・RC内壁に一部軽微なクラックが認められる。
- ・屋上屋外機置場のヒートポンプ給湯器が1/60ほど北側(背面側)へ傾斜している。

◆体育館範囲

- ・各方向共に柱の傾斜は認められない。
- ・RC外壁にクラック等、有害な損傷は認められない。

- ・木造屋根トラス北側端部直下コンクリート躯体表面の一部に若干の浮きが認められる。
- ・その他木造トラス端-RC 躯体アンカー取合部に特に損傷は認められない。
- ・木造トラス下弦の金輪継手目違部を起点に若干の垂直割れがみられる。

(5-2) 管理棟：RC 造+木造、直接基礎（べた基礎）

- ・Y5 通り木造柱列に背面方向へ 1/300 程度の僅かな傾斜がみられるが、各仕口部の馴染みで問題なく変形吸収できており、構造安全上の問題はないと判断される。
- ・RC 部分は各方向共に柱の傾斜は認められない。
- ・木部材、接合部、RC 部共に、特に有害な損傷は認められない。
- ・事務室上部木造トラス下弦材に若干の面外方向残留変形がみられる。
- ・管理棟-体育館棟会議室部の接続部床 Exp.J.部に仕上げの亀裂、若干のレベル差がある。

(5-3) 特別棟：RC 造+木造、場所打ちコンクリート杭地業

- ・RC 部、木造部ともに各方向共に柱の傾斜は認められない。
- ・木部材、接合部、RC 部共に、特に有害な損傷は認められない。
- ・逆円錐形の木造部金属屋根仕上げ鋼板中央付近に僅かな斜めの波形がみられる。
- ・教室棟-特別棟の接続部屋根の Exp.J.部シール切れ、笠木の局部変形がある。
- ・教室棟-特別棟の接続部床 Exp.J.部に仕上げの亀裂箇所がある。

(5-4) 教室棟A~D棟：木造、地盤改良+直接基礎（べた基礎）

- ・A~D 各棟とも、各方向共に柱の傾斜は認められない。
- ・外壁仕上げラスモルタルに亀裂は認められず、建屋の水平方向せん断変形の形跡が殆ど認められない。
- ・特別棟との縦 Exp.J.部には高さ方向に最大 1cm 程度の一定幅の動きの痕跡がある。
- ・外構土間コン部目地部には各所に押し引きの痕跡がある。
- ・木部材、接合部共に、特に有害な損傷は認められない。
- ・連層耐震壁上層付帯柱の柱脚引きボルト接合部に若干の開きのある箇所がある。



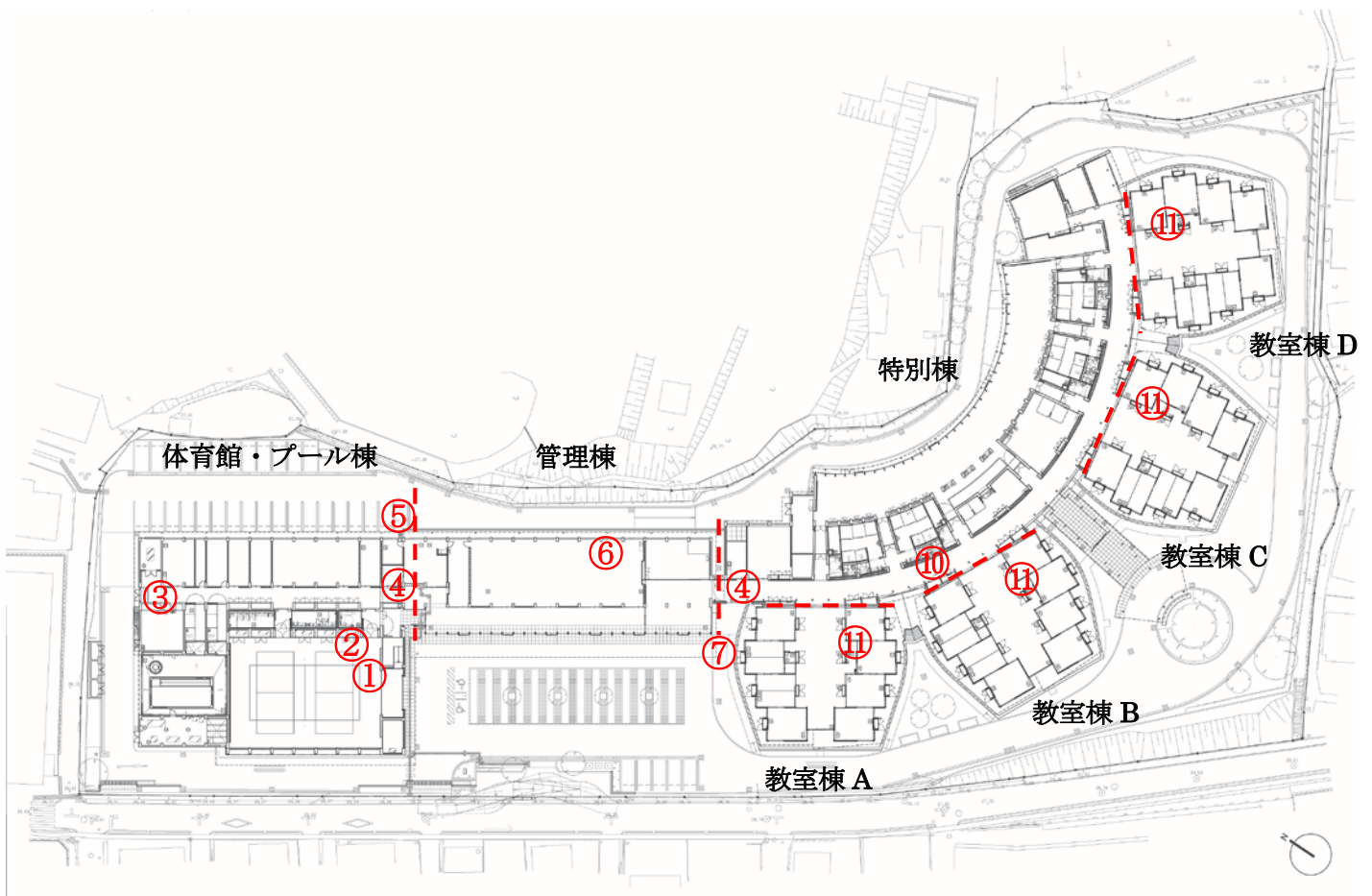
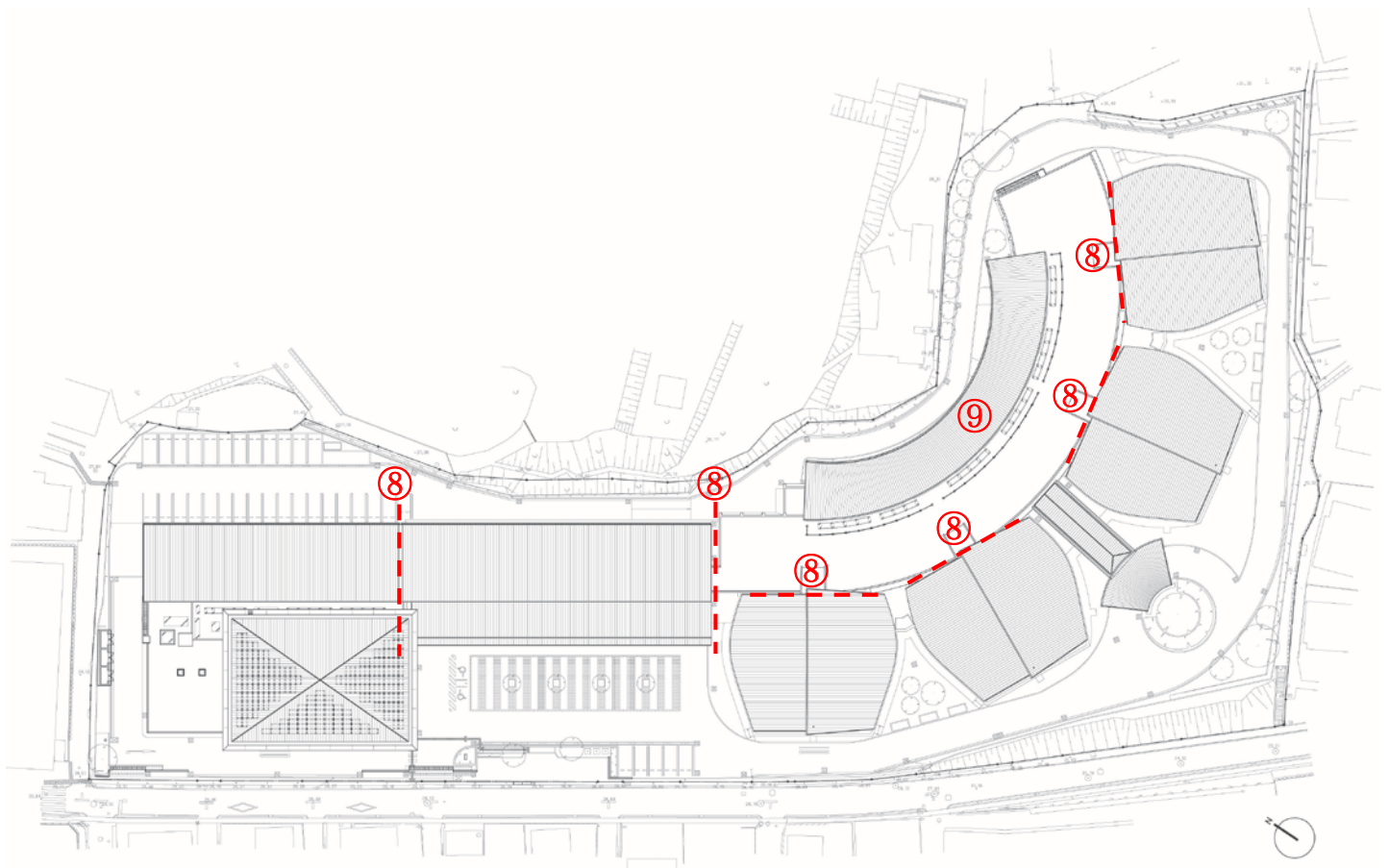
10mm 程度移動の痕跡

5mm 程度移動の痕跡

(a)特別棟 (RC 側) - 教室棟 (笠木側) 屋根 Exp.J 部 (b) 教室棟-特別棟外壁 Exp.J 部

写真 1 建物移動の痕跡

(6) 調査詳細報告箇所一覧



① 木造トラス継手部の亀裂とはらみ

(体育館・プール棟)



- ・ X11a 通り付近の木造トラス下弦中央部の金輪継手目違部を起点に若干の垂直割れが見られる。タイロッド部において、下弦材が面外方向へ変形し残留変形が若干みられる。
- ・ 上記と同じ事象が他の通りにもないか再点検することが望まれる。
- ・ 緊急性はないものの、継手部においては、経年変化による割れの進行を止めるため、補強として木ビス等を追加打ちし、割裂進行を防止する補強を行うことが望まれる。タイロッド部においては、トラス位置が変化しないようにナットの締めこみを行った方が望ましい。ただし、木造部に面外方向の強制変位が生じないような締めこみ方をする必要はある。

② 木造トラス端部接合部直下のコンクリートの浮き

(体育館・プール棟)



- ・ Y5 通り側 X11 通り付近の木造屋根トラス北側端部直下コンクリート躯体表面の一部に若干の浮きが認められる。
- ・ コンクリートの浮き部分落下による 2 次災害を防ぐため、当該範囲を欠き落とす必要がある。鉄筋のかぶりが少なくなる場合は、保護材を塗布することが望ましい。

③ RC 壁面のひび割れ

(体育館・プール棟)



- ・ Y6 通り X1～X2 通り間の RC 耐震壁（厚さ 180mm）上部に幅 0.1～0.3mm、長さ 1m 程度の斜めクラックが認められる。
- ・ 建物端部のため地震起因ではなく乾燥収縮が原因である可能性が高い。微細かつ部屋内のため、特に補修を要さない範疇と判断できる。

④ 床面 Exp.J.部上下ずれによる段差

(体育館・プール棟－管理棟－特別棟)



- ・ 体育館棟会議室部－管理棟、管理棟－特別棟の接続部床 Exp.J.部の仕上げに亀裂、若干（3mm 程度）のレベル差がある。いずれの箇所も、管理棟側が下がっている傾向にある。
- ・ 当該部は、管理棟が直接基礎であるのに対し、取り合う両棟は杭基礎であるため、杭基礎側にブラケットを設け、管理棟の基礎を Exp.J.部全体にわたりブラケットにて支持させている。管理棟側が若干低くなった原因として、接合部のスタイロフォーム収縮が考えられる。
- ・ 車椅子での移動に配慮し補修時期を決定するべきであるが、上下のレベル差が進行しなくなった時点で、モルタル等により段差部を平滑化し、再度仕上げを行う等の補修方法が考えられる。

⑤ ExP.J.部の外構破損

(体育館・プール棟-管理棟)



- ・ 体育館・プール棟-管理棟 **Exp.J.**部において、特に北東側の外部階段で、コンクリートおよびモルタルの破損が見られる。
- ・ 使用上の観点から、破損したモルタルの除去等を行う。

⑥ 木造トラス下弦材の残留変形

(管理棟)



- ・ 職員室上部の数本の木造トラス下弦材 Y8 通り側に面外方向の残留変形が若干みられる。
- ・ 金輪継手には接合箇所における垂直割れが見られないため、特に補修を要さない範疇と判断できる。

⑦ 木造柱の縦割れ

(管理棟)



- ・ Y5a-X27 通りの木造柱上部に縦方向の割れが生じている。地震による被害ではなく、乾燥収縮による自然割れと判断される。
- ・ 当該柱は構造安全性上の問題はないが、吹き降りの及ぶ外部面であるため、木材内部への雨水侵入を避ける表面保護対策が望まれる。例えば、割れ部分に防腐剤を塗布し、外側に通気用のすき間をあけて板張りする等の措置が考えられる。

⑧ 屋根 Exp.J.部の笠木破損

各棟共通



- ・ 教室棟と特別棟の接続部屋根の Exp.J.部のシール切れ、また笠木が局部変形している。
- ・ 雨水進入防止のため、シールの打ち替えと笠木の補修が望まれる。

⑨ 多目的ホール上部金属屋根仕上げの波打ち

(特別棟)



- ・ 逆円錐形の木造部金属屋根仕上げ鋼板中央付近に、若干の面内せん断座屈による僅かな斜めの波形が見られる。
- ・ 構造上の問題はないが、屋根仕上げ板ハゼ部に雨漏りの原因となり得る歪みがないか近接しての確認が望まれる。

⑩ 床面 Exp.J.部の仕上げ破損

(特別棟－教室棟 B)



- ・ 特別棟と教室棟 B の Exp.J.部において、コルクタイルがひび割れている。
- ・ 教室棟自体が 5mm 程度動いた痕跡があり、仕上げが引張られたと考えられる。
- ・ 固定ガラス側における破損であるため、必要に応じて補修を行う。

⑪ 連層耐震壁付帯柱における柱脚の浮き

(教室棟)



- ・ 教室棟各棟、主に X5 通り部屋内側の連層耐震壁上層付帯柱における柱脚引きボルト接合部に若干の開き (3~4mm 程度) がある箇所がある。
- ・ 緊急性はないが、引きボルトの追い締めか、隙間への楔打ち等を施すことが望ましい。楔打ちの場合は水平引きボルト起因の割裂を誘発しないよう注意が必要である。

(7) 補修について

4月25日までの学校による調査項目、4月25日の日建設計による調査項目の双方に対する補修の必要性の有無について、下記にまとめる。

◎：構造安全性上および耐久性上、緊急を要する補修が必要と判断

○：構造安全性上および耐久性上、補修を要すると判断

△：構造安全性上および耐久性上補修は必要ないが、使用上の観点から判断が必要

◆4月25日までの学校による調査項目

番号	当該部	被害状況	補修
1	体育館	体育館棟東側外壁床目地破損及び石床亀裂	△
2	管理棟	管理棟南側内部床目地破損・外部出入口上部笠木浮き	△
3	教室棟	教室棟南側外部縁石の剥離	△
4	外構	隣接地からの墓石落下に伴うブロック・舗装道路破損	○
5	各棟共通	事務室北側外部階段等モルタル破損 (=⑤)	△
6	管理棟	管理棟廊下木造梁ひび割れ	△
7	管理棟	職員室金庫転倒に伴う床破損	○
8	管理棟	管理棟東西エキスパンション段差拡大 (=④)	△
9	教室棟	特別棟-教室棟 Exp.J.間コーキングひび割れ、笠木破損 (=⑧)	○
10	会議室屋上	ヒートポンプ給湯器基礎破損	○
11	特別棟	特別棟北側外部梁コーキング破損	○
12	体育館	体育館柱上部モルタル剥離 (=②)	○
13	教室棟	教室棟 B 棟 Exp.J.部廊下コルクタイルひび割れ (=⑩)	△

◆4月25日の日建設計による調査

番号	当該部	被害状況	補修
①	体育館	木造トラス継手部の亀裂とほらみ	○
②	体育館	木造トラス端部接合部直下のコンクリートの浮き	○
③	会議室	RC 壁面のひび割れ	△
④	管理棟	床面 Exp.J.部上下ずれによる段差	△
⑤	会議室-管理棟	Exp.J.部の外構破損	△
⑥	管理棟	木造トラス下弦材の残留変形	△
⑦	管理棟	木造柱の縦割れ	○
⑧	各棟屋上共通	屋根面 Exp.J.部の笠木破損	○
⑨	特別棟屋根	多目的ホール上部金属屋根仕上げの波打ち	△
⑩	教室棟 B 棟	床面 Exp.J.部の仕上げ破損	△
⑪	教室棟各棟	連層耐震壁付帯柱における柱脚の浮き	○

以上

3 アンケート結果(抜粋)

(1) 避難をされた方へのアンケート結果について(平成28年5月8日までに実施)

ア アンケート項目

- ①性別
- ②年代
- ③いつから避難していますか？
- ④一番足りないものは何だと思われませんか？
- ⑤この避難所でよかったことはありますか？(複数回答)
- ⑥避難所についての要望はありますか？
- ⑦今後どんな備えが必要だと思いませんか？
- ⑧熊本地震についての思いをご自由に記入してください。

イ 回答者数 53人(平成28年5月8日までに実施・回収)

ウ 結果(抜粋)

①性別

男性 12人 女性 41人

②年代

10代以下	11人(21%)
20代	3人(6%)
30代	7人(14%)
40代	7人(14%)
50代	7人(14%)
60代以上	16人(30%)
無回答	2人(4%)

③いつから避難していますか？

4月14日	2人(4%)
4月15日	14人(26%)
4月16日	25人(47%)
4月17日	2人(4%)
4月18日	1人(2%)
4月19日	1人(2%)
無回答	8人(15%)

④一番足りないものは何だと思われませんか？

水 (13人が回答)

食糧 (3人が回答)

マット、タオル、毛布、常備薬、衛生用品

人員 (高齢者の対応が出来るスタッフ)

⑤この避難所でよかったことはありますか？次の中から選んでください。

(複数回答可)

【場所・スペース・トイレ・物資・空調設備・人員（スタッフ）・その他】

場所	32人
スペース	25人
トイレ	30人
物資	19人
空調設備	25人
人員（スタッフ）	28人

その他

- ・感謝・感謝です
- ・スタッフがとても親切で助かった
- ・駐車場が広い
- ・テレビでの情報共有
- ・電力供給

⑥避難所についての要望はありますか？

- ・大変感謝感謝です。思ってもみない強い地震に見舞われとても不安な中、先生方の心からの御親切に大変うれしく思います。私たちもこちらに伺えたことを大変有難く、又、お食事も1日目にパン1個頂けたのには嬉しく、その後、温かいご飯に八宝菜でしたが、あの時の涙がこぼれながら頂くことができましたこと、本当に有難かったです。
- ・安心するまで置いていただければ幸いです。
- ・皆さんに大変親切にさせていただき、不安な日々を乗り切ることができました。本当に感謝しています。ありがとうございました。
- ・スタッフの皆様、大変でした。本当に感謝しております。
- ・毎日みんなで掃除をして、きれいに保てているのでとても良いと思う。
- ・指定されていないにもかかわらず、すごくすごく良かったです。
- ・施設が充実しており、避難していると思えないほど快適に過ごせました。配給の仕方、スタッフの行動等本当に思いやりのあふれる対応に校長先生をはじめ、皆様のおかげで温かな気持ちで過ごせました。
- ・トイレの水を十分にほしい。
- ・災害時に開放していただけると、住民として大変助かります。
- ・駐車場を多く確保してほしい。
- ・こちらの施設のスタッフの方の見分けがつきづらかったので、すぐ分かるように、腕章などあれば助かります。
- ・避難所指定していただいて、給水など直接物資が届けば有難い。
- ・初めのころは城西小との配給（水）の連絡がうまくいっていなかった。
- ・ペットの多さにびっくりしました。ペットのいる人、いない人で別々の場所にとつくづく思う。アレルギーの人、苦手な人の気持ちも分かってほしい。どうにかなりそうだった。
- ・トイレのスリッパと室内のスリッパの区別を分かりやすく明確に掲示してあるとバラバラにならないと思いました。感染予防を呼びかける。お年寄りと

子どもがいる家族を散らして（ひとまとめ）避難させると配膳などしやすいし、生活リズムが違うので過ごしやすいと思う。

⑦今後どんな備えが必要だと思いますか？

- ・今回初めて避難させていただきましたが、水不足が一番でしたので、水の貯えでしょうか。
- ・ドライタオル、雑巾。
- ・2日～3日分（救援物資が届くまで）の備えは自己責任として用意しておかねばならないとつくづく思いました。今回は気候がいい時期でしたが、寒さ暑さが厳しい時の備えも必要だと思います。
- ・雨水を溜めるタンクがあって助かった。
- ・生活用水、水や食料の備蓄、毛布やマット。（複数回答）
- ・喫煙場所。
- ・突然の災害だったが、開校したばかりの学校で備えはとても良かった。
- ・薬、体調不良時の対応。
- ・そもそも、避難所ではないので十分。
- ・人員増員。
- ・地下タンクの増設。
- ・ペットのいる人への場所の確保・提供。

⑧熊本地震についての思いをご自由に記入してください。

- ・スタッフ、ボランティアの方々の心づかいにびっくりしました。いやな顔一つせず、一生懸命で本当に頭の下がる思いです。ありがとうございました。あまり無理せず、ゆっくり頑張ってください。
- ・天災はつらい経験ですが、人の温かさを感じたり、地球の環境問題を考える機会になりました。頑張って乗り越えていきたいと思います。
- ・生まれて初めて地震の恐怖を知りました。今も恐怖で仕方ありません。この地震で命を落とされた方々のご冥福をお祈りいたします。まだまだこれから先、どんな災難が待っているかも知れませんが、出来るものなら乗り切っていきたいと思います。かがやきの森支援学校の校長先生はじめその他の先生方、親切にしてくださり、ありがとうございました。それから、私たちを助けて下さり、感謝いたしております。
- ・生まれて初めての体験でした。病気の母を連れての避難所生活、大変でしたが、阪神地震などの方の気持ちがよくわかりました。この経験を生かして、常に備えていこうと思いました。
- ・早く家に帰って、一日でも早く不安から解放されたい。
- ・怖い一言に尽きる。CoCo一番屋のカレーがおいしく、この味を忘れない。
- ・まさか自分の身にこのようなことが起こるとは思ってもみなかったのですが、ただ不安が募るばかりです。
- ・天災は他人ごとでない。助け合いの気持ちが大事と感じるいい機会だった。
- ・余震のアラームが一斉に鳴るたびにビクビクする毎日ですが、受け入れて下さり、感謝しています。（五瀬校長先生をはじめ、全ての職員の方々に♡）

(2) 熊本地震に関する保護者アンケート結果について

※熊本県特別支援学校知的障害校PTA連合会からの依頼を受けて平成28年9月実施。アンケート項目より自由記述で被災状況や保護者の困り感が分かるものを抜粋。

ア 地震後、避難しなかった理由

- ・水は出ませんでしたでしたが、飲み水や調理できる水もあり普段に近い生活ができたため。夜はしっかり睡眠をとりたかったので、家の駐車場で2泊しました。
- ・自宅の被害もなくライフラインが途切れることがなかったため。
- ・コンクリートの家で、自宅に被害はなく駐車場も広く十分に安全を確保でき、食料、水もあったため避難はしてません。
- ・1週間分のミネラルウォーターと食料の備蓄があったため。車中泊4～5日。
- ・車中泊は避難所に不安（抵抗）があり、家の被災状況もそうひどくなかったため。
- ・自宅の被害があまりなかったため
- ・障がい児を連れて、体育館などに行くのは厳しいと思った。
- ・被害もなく生活できる状態だったため。

イ 避難生活で困ったこと

- ・避難所で十分よくしていただいたので、特に困ったことはなかった。
- ・震災直後から放課後等デイサービス（日中の時間）が受け入れて下さり、物資なども江津湖療育医療センターより連絡をもらい、たくさんいただきました。また、かがやきの森支援学校の先生方の御配慮など、すごく助かりました。
- ・ほとんど実家で過ごしたため、困ったことはありません。
- ・子どもが状況も分からずウロウロ大声を出すので、周囲の方への迷惑など、いろいろ考えると大変でした。
- ・子どもの薬がたまたまたくさんもらった時だったのですが、その後の受診が近日であった為、避難先の近くに安心してかかれる病院があるか。
- ・酸素をしていて（夜間）、2日ほどは無い状態で過ごした。電話連絡で支部がすぐ手配。
- ・食事の加工が必要だが、避難時は持ち出しが出来ず、避難先で買いに行き入手した。
- ・本人の姉と一緒にいてくれる間に、買い物へ出たりできるが、勝手が違うので母自身のみで動いて子どもたちへしてやれることが極端に少なくなった。やはり、避難先への遠慮もあり、心休まる時が家族みんな無く、普段よりストレスは感じていた。避難した（滞在）事への見返りを求められた。
- ・ライフラインの復旧に時間がかかったため、水の確保やお風呂に入れられないのが困った。
- ・かかりつけの病院が被災して外来・入院が行えなくなった為、体調が悪くても受診できない。
- ・避難先では病気の理解が乏しく、治療に困った。医ケアがあり、避難先では、自分しか見る人がおらず、休めない。自宅の片づけにも行けない。

- ・支援学校に避難しました。建物がしっかりしているし、子どもは自分の教室で過ごすことができたので、安心して過ごせました。時々、先生方とお会いできたのも安心しました。
- ・熊本は物資（医薬品）に制限がかかって、気切のガーゼがかえられない等、衛生面で困った。
- ・医療的ケアのある子なので、衛生面で十分な事が出来ず困った。薬の保管等。
- ・避難中も体調を崩し、安心・安全な環境で看病してあげたかった。
- ・下にいる妹、弟のフォローも大変でした。
- ・私自身も余震が続き、予測不能の日々で怖いし不安だし・・・早く安らげる日常が戻りますように。
- ・余震が多く避難所内では不安になった為、駐車場で過ごしました。初日しばらく過ごした避難所内が埃っぽかった為か、3日目には脱水を起こしました。当初、ペースト食や大きいサイズのオムツがなく、困りました。また、医療用品（胃瘻チューブや注射器）・薬は持ち出せず、避難したため水分や栄養の補給が難しかった。2日目に何とか自宅に取りに戻りました。いつでも出せるようにしておくことが大事と思いました。
- ・かかりつけ病院に入院できて3日目、県外の病院へ転院をすすめられ、従いました。入院に必要なものは、ほぼそろっていましたが、ドクターヘリでの移動で、荷物の制限があり、荷物は家族が運ばなければなりませんでした。高速道路も一般道も渋滞がひどく、かなり時間がかかり大変でした。県外は安全という点では申し分ないのですが、ニュース（テレビ）などでの情報があまり得られませんでした。熊本の様子があまりわからない不安な2週間でした。
- ・毎日浣腸しなければならないため、臭いの問題もあり、避難所でできず、車内で行うのも大変でした。
- ・地区で指定された避難所ではなかったため、いつまで避難させてもらえるのか不安でした。水や物資は支給してもらえなかったため、大変でした。お風呂に入れなかったこと。3日目に体を冷たい水でタオルを濡らして拭いて、1週間に自宅でシャワー浴をしていましたが、時間制限してあったので、2日おきにシャワー浴をしていました。
- ・食料、物資に並ぶことができない。大人は食料1食でも我慢できましたが、子どもに伝わらずにつきました。入浴ができなかった。オムツ使用や車椅子等、混雑する場所に連れて行けなかった。
- ・水道十分になかった為、ガスも使えず気管切開で使用するチューブを入れるケースなど、消毒が十分に出来なかったため、清潔に保てなかったのが不便でした。清潔操作で扱わなければいけないところで、できなかった。気切、胃ろうからの栄養ボトル、注射器等・床に寝ないといけなく、換気・騒音、それに排便・排尿時の処理にとっても困りました。すぐ側に他人が何人もいるところで気をつかいながら毛布をかぶってやりました。165cm、50kgの我が子を度々バギーに乗せ、移動は困難だし、処理に使用するスペースなども全くなかったため。結局、肺の調子（換気）が悪化し、病院に行くこととなり、以降は療育センターに2か月過

ごすことになる。

- ・避難した職場のライフラインは止まっておらず生活はできたが、自宅と離れており、片づけや荷物を運んだり子どもたちを職場に残して進めることとなり、その間、余震が続いており心配だった。避難中に仕事再開しなければならず、精神的負担が大きかった。
- ・息子は医療的ケアを必要とし、医療機器をつけながら在宅で生活しています。本来なら、病院という避難場所になるのですが、下に小さい弟もいて、息子だけに付いて避難するわけにはいきませんでしたので、下の小さい弟も母親を必要とするので家族一緒に避難できることを地震のときには選択しました。ライフラインが通っている親戚の家に避難しましたが、弟が慣れない環境、地震のストレスで体調を崩してしまい、医療的ケアで息子の側を離れられない状況と、病院で受診が必要な弟との両立が困難になり、息子を施設に一時的に預けることになりました。もっと、近くで医療の必要な子どもたちも安心して家族で避難できる場所がほしい。地域の学校だけの避難場所設置ではなく、いざというときは災害前から支援学校も避難の選択ができるよう環境を作っていただきたい。
- ・水が全く足りず困りました。（経管栄養ボトル、注射器を洗浄する水など）医療的なものが不衛生な状態でした。
- ・車中でのおむつ交換が大変でした。
- ・いつも便秘する子どもが何回も便が出ました。お風呂にも入れず、洗えなかったのかぶれ、夜も何度も起き熟睡できずけいれん発作も増えました。

ウ 地震後、不安に感じていること

- ・前回の避難を踏まえ、また地震時の対応をどうしたらいいか考えてしまう。同じ場所へは避難しづらい。
- ・学校が遠く、毎日の送迎の負担が多い。自分自身の体力や生活に不安を感じる。
- ・仮住まいの状態ですし、物件なく行先が不安。生活環境変化。
- ・家族で避難できる場所がない。（医療的ケアや医療機器があるため）

4 平成29年度の学校防災の取組について（案）

学校生活部

（1）学校防災マニュアルの作成と関連項目の実施について

事前の危機管理（備える）

- ア 学校防災年間計画の作成
 - 防災教育（防災学習・防災指導）について
 - 実践的な避難訓練について
 - 防災に関する教職員の研修の計画と実施、情報提供及び情報共有方法について
 - 保護者や地域、自治体と連携した体制について
- イ 地震による非構造部材等の落下・転倒・移動防止などの防災の視点を安全点検項目に盛りこんだ安全点検について
- ウ 災害発生時の対策本部の役割と業務内容の明確化
- エ 災害発生時の教職員の動員体制の明確化

発生時の危機管理（命を守る）

- オ 時間帯別の対応
 - 在校時の対応（児童生徒がいる時間、登校前、下校後の時間）
 - 登下校時の対応
 - 校外学習時等の対応
 - 在宅時の対応

事後の危機管理（立て直す）

- カ 安否確認、引き渡しの基準及び安否確認方法の明確化
- キ 避難所になった場合の協力マニュアルの作成
- ク 心のケア体制、教職員の役割
- ケ 学校再開に向けての取組
- コ 備蓄の管理
その他
- サ 資料様式
各カード等

（2）学校運営協議会に関する業務

- ア 避難所として学校を活用する際の地域住民と学校関係者との協力体制の確認
受け入れ対象者、提供可能施設設備、校内避難エリア、運営主体、備蓄の在り方等
- イ 避難所運営の際のマニュアルの作成及び情報共有
市町村との連携、近隣避難所との連携、学校再開後の避難所の在り方等
- ウ 熊本地震を踏まえた各家庭及び医療機関との連携の在り方
- エ 市町村行政及び警察・消防との災害時の初期対応の連携体制確認
- オ 年間計画

開催月	協議会議題	構成
6月	第1回 運営方針、計画等の確認	・校長、防災主任 ・PTA会長
10月	第2回 防災マニュアル等の検討	・本校評議委員4人 ・市行政担当者2人
2月	第3回 総括、次年度の取組	・町内自治会長1人 ・消防所長1人

(3) 学校防災年間計画

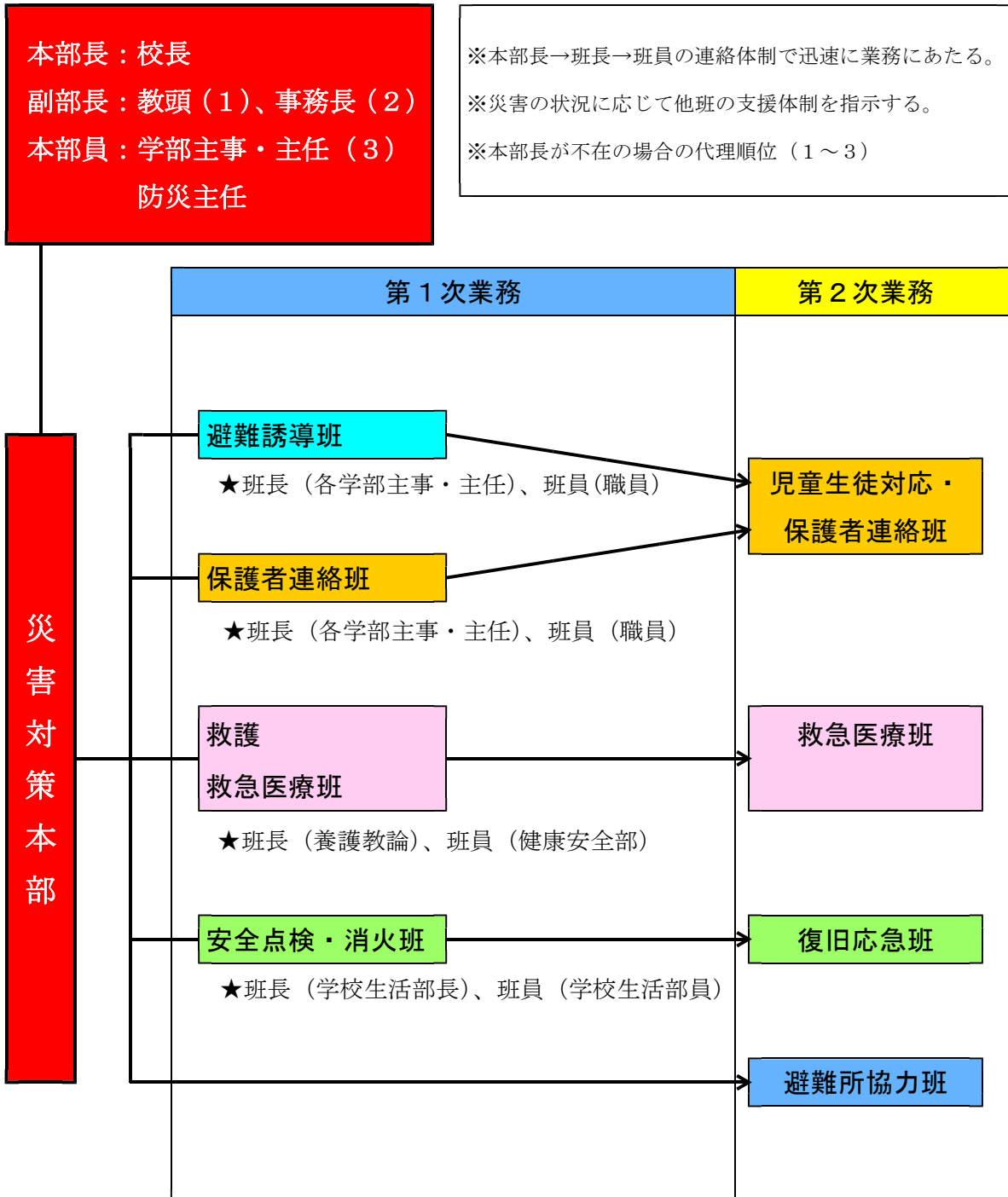
月	防災教育（防災学習・防災指導）		防災管理	組織活動	
	教科等	自立活動	特別活動	関連行事	
4		・コミュニケーション能力の向上 ・心理的な安定		・安全点検 ・危機管理マニュアル確認	
5			火災避難訓練	・安全点検 ・心肺蘇生法実技訓練	
6	Jアラートの音を聞こう			・安全点検 ・第1回学校運営協議会	
7	消火器の場所を探そう			被災地コンサート 夏休みの過ごし方	・安全点検 ・消火器、消火栓の使い方研修 ・防火扉が閉まった場合の対応研修 ・備蓄点検
8				・安全点検	
9				・安全点検 ・発電機の使い方研修	
10				地震避難訓練	・安全点検 ・学校防災マニュアル（地震）の検討 ・第2回学校運営協議会
11	備蓄食料を試食しよう				・安全点検 ・備蓄米炊き出し訓練
12				もちつき 冬休みの過ごし方	・安全点検 ・備蓄点検
1					・安全点検 ・発災時の班別シミュレーション
2					・安全点検 ・第3回学校運営協議会
3				春休みの過ごし方	・安全点検 ・備蓄点検

検討事項

- 1 児童生徒の防災教育内容
- 2 その他必要な訓練 等
 - * 地域合同訓練
 - * 避難所想定打ち合わせ（地域、行政）

(4) 災害対策本部の設置について

ア 基本編成図



※第一次業務は、児童生徒等の安全が一旦確保された段階で行う業務であり、第二次業務は、被害状況に応じて行う業務として示す。

イ 対策本部等の役割とその業務内容

業務分担	役割	準備物	災害発生時～1日	2日～3日
対策本部	<input type="checkbox"/> 各班との連絡調整 <input type="checkbox"/> 非常持ち出し書類の搬出保管 <input type="checkbox"/> 校内の被災状況把握 <input type="checkbox"/> 記録日誌・報告書の作成 <input type="checkbox"/> 校内放送等による連絡・指示 <input type="checkbox"/> 応急対策の決定 <input type="checkbox"/> 市町村対策本部との連絡 <input type="checkbox"/> 報道機関への連絡、対応 <input type="checkbox"/> PTAとの連絡調整 <input type="checkbox"/> 情報収集	<input type="checkbox"/> 緊急マニュアル <input type="checkbox"/> 学校配置図 <input type="checkbox"/> 携帯ラジオ <input type="checkbox"/> ハンドマイク <input type="checkbox"/> 懐中電灯 <input type="checkbox"/> 緊急活動の日誌 <input type="checkbox"/> 携帯電話 <input type="checkbox"/> 児童生徒名簿 <input type="checkbox"/> 職員名簿 <input type="checkbox"/> 一斉メール <input type="checkbox"/> 緊急連絡網 <input type="checkbox"/> トランシーバー	<input type="checkbox"/> 外部からの問い合わせ対応 <input type="checkbox"/> 関係機関へ被災状況を報告 <input type="checkbox"/> 教職員体制指示 <input type="checkbox"/> 教職員の配置検討(時間外) <input type="checkbox"/> 関係機関、市町村から情報入手 <input type="checkbox"/> 出勤者の確認(時間外) <input type="checkbox"/> 避難場所の確定	<input type="checkbox"/> 外部からの問い合わせ対応 <input type="checkbox"/> 外部ボランティアの受け入れ <input type="checkbox"/> 連絡調整
安否確認 避難誘導班	<input type="checkbox"/> 児童生徒等及び教職員の安否確認 <input type="checkbox"/> 安全な避難経路で避難誘導 <input type="checkbox"/> 負傷者の把握 <input type="checkbox"/> 下校・指導及び待機児童生徒等の掌握・記録 <input type="checkbox"/> 揺れが収まった直後の負傷程度の把握 <input type="checkbox"/> 行方不明の児童生徒等・教職員を本部に報告	<input type="checkbox"/> ヘルメット	<input type="checkbox"/> 教職員とその家族の安否確認 <input type="checkbox"/> 児童生徒等の安否確認 <input type="checkbox"/> 児童生徒等の家庭の安否確認、安全な場所へ誘導 <input type="checkbox"/> 家庭への安全な下校指導 <input type="checkbox"/> 待機場所の確保	<input type="checkbox"/> 外部からの安否問い合わせ対応
安全点検・ 消火班	<input type="checkbox"/> 初期消火 <input type="checkbox"/> 避難、救助活動等の支援 <input type="checkbox"/> 被害の状況確認(施設等の構造的な被害程度を調査、本部への連絡、電気、ガス、水道、電話の被害確認) <input type="checkbox"/> 校内建物の安全点検・管理 <input type="checkbox"/> 近隣の危険箇所の巡視 <input type="checkbox"/> 二次被害の防止	<input type="checkbox"/> 消火器 <input type="checkbox"/> ラジオ <input type="checkbox"/> ヘルメット <input type="checkbox"/> 手袋 <input type="checkbox"/> 道具セット <input type="checkbox"/> 被害調査表等 <input type="checkbox"/> バケツ	<input type="checkbox"/> 消火活動 <input type="checkbox"/> 校舎内外の被災状況を確認 <input type="checkbox"/> 電話・FAX・パソコン使用確認 <input type="checkbox"/> 水道電気ガスの状況確認 <input type="checkbox"/> 職員の宿直場所の確保 <input type="checkbox"/> 備蓄倉庫の備品確認 <input type="checkbox"/> 学校中の鍵の確保	<input type="checkbox"/> 備蓄品の搬出 <input type="checkbox"/> 必要備品の確保 <input type="checkbox"/> 地域の被害状況調査 <input type="checkbox"/> 被災状況確認

業務分担	役割	準備物	災害発生時～1日	2日～3日
応急復旧班	<input type="checkbox"/> 被害状況の把握 <input type="checkbox"/> 応急復旧に必要な機材の調達と管理 <input type="checkbox"/> 危険箇所の処理 <input type="checkbox"/> 危険箇所の立入禁止措置 <input type="checkbox"/> 危険箇所の表示 <input type="checkbox"/> 避難場所の安全確認	<input type="checkbox"/> 被害調査表 <input type="checkbox"/> ヘルメット <input type="checkbox"/> 構内図 <input type="checkbox"/> ロープ <input type="checkbox"/> 標識 <input type="checkbox"/> バリケード	<input type="checkbox"/> 管理室転倒備品等の復旧 <input type="checkbox"/> 教職員の活動場所の確保	<input type="checkbox"/> トイレの汚物処理と清掃 <input type="checkbox"/> プール水の利用設置 (小学校) <input type="checkbox"/> ゴミの処理
救護 救急医療班	<input type="checkbox"/> 児童生徒等及び教職員の救出・救命 <input type="checkbox"/> 負傷者や危険箇所等の確認及び通報 <input type="checkbox"/> 担当区域で負傷者の搬出 <input type="checkbox"/> 学校施設内のチェック <input type="checkbox"/> 養護教諭及び救命救急経験者で構成 <input type="checkbox"/> 医師等の確保・手当備品の確認 <input type="checkbox"/> 負傷者の保護・応急手当 <input type="checkbox"/> 関係医療機関との連携	<input type="checkbox"/> 防災マスク <input type="checkbox"/> ヘルメット <input type="checkbox"/> スコップ <input type="checkbox"/> 毛布 <input type="checkbox"/> 革手袋 <input type="checkbox"/> のこぎり・斧 <input type="checkbox"/> トランシーバー <input type="checkbox"/> 担架 <input type="checkbox"/> AED <input type="checkbox"/> 応急手当の備品 <input type="checkbox"/> 健康カード <input type="checkbox"/> 水	<input type="checkbox"/> 救助活動 <input type="checkbox"/> 近隣被災者の救助活動 <input type="checkbox"/> 学校施設危険箇所の応急処置 <input type="checkbox"/> 応急手当の備品保 <input type="checkbox"/> 負傷者対応	<input type="checkbox"/> 必要備品の調達 <input type="checkbox"/> 地域と連携した学校周辺危険箇所の応急処置 <input type="checkbox"/> 救護所の設置対応 <input type="checkbox"/> 近隣医療機関との連携による救護所の設置対応
保護者 連絡班	<input type="checkbox"/> 引き渡し場所の指定 <input type="checkbox"/> 身元確認 <input type="checkbox"/> 保護者等が到着した順に児童生徒等を引き渡す	<input type="checkbox"/> 引き渡しカード <input type="checkbox"/> 出席簿 <input type="checkbox"/> 集合場所の配置図	<input type="checkbox"/> 引き渡し場所の状況把握 <input type="checkbox"/> 保護者等との対応 (家庭の様子や安全の状況確認)	<input type="checkbox"/> 保護者等との対応 (家庭の様子や安全の状況確認)
避難所 協力班	<input type="checkbox"/> 避難者の名簿作成 <input type="checkbox"/> 緊急物資の受け入れと管理 <input type="checkbox"/> ボランティアの受け入れ <input type="checkbox"/> 市町村及び自主防災組織と連携した避難所の運営支援	<input type="checkbox"/> マスターキー <input type="checkbox"/> ラジオ <input type="checkbox"/> ロープ <input type="checkbox"/> テープ <input type="checkbox"/> 校内配置図 <input type="checkbox"/> 避難者への指示 (文書)	<input type="checkbox"/> 避難所開設準備 <input type="checkbox"/> 地域の代表者との初動の確認	<input type="checkbox"/> 救援物資の受領仕分け、配付、保管 <input type="checkbox"/> 避難者に必要な物資の調達 <input type="checkbox"/> 仮設トイレの設置、避難者数の掌握、名簿の作成

※上記については、あくまでも例であり、状況によっては必要な業務内容の優先順位を決めて実施する。

ウ 教職員の動員体制

(ア) 第1配置例

配置発令基準	震度5弱若しくは震度5強の地震が発生した場合 本部長が当該配置を指示した時				
本部設置	○災害対策本部設置（安全確保、避難誘導、情報収集、連絡活動、応急対策等）				
本部長（校長）		災害対策委員メンバー		教職員	
勤務時間内	勤務時間外	勤務時間内	勤務時間外	勤務時間内	勤務時間外
<ul style="list-style-type: none"> ・直ちに配置につく ・迅速な避難誘導 ・避難者の対応 ・教育委員会への報告 	<ul style="list-style-type: none"> ・直ちに学校での配置につく ・災害の情報、状況を確認し、必要に応じた対応を指示する。（児童生徒の安否確認、施設の破損状況、登校の判断） 	<ul style="list-style-type: none"> ・直ちに配置につく ・避難の指示を放送で流す。 ・情報を収集し、職員に周知する。 ・全職員に業務し、迅速に対応できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・直ちに学校での配置につく ・本部長から指示を受けた内容を全職員に周知する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・指示を受けた職員はその業務にあたる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・校長が必要と認めた場合、職員は配備につく。

(イ) 第2配置例

配置発令基準	震度6弱以上の地震が発生した場合又は大津波警報が発表された場合に本部長が当該配置を指示した時				
本部設置	○災害対策本部設置				
本部長（校長）		副本部長等		教職員	
勤務時間内	勤務時間外	勤務時間内	勤務時間外	勤務時間内	勤務時間外
<ul style="list-style-type: none"> ・直ちに配置につく ・迅速な避難誘導 ・避難者の対応 ・教育委員会への報告 	<ul style="list-style-type: none"> ・直ちに学校での配置につく ・災害の情報、状況を確認し、必要に応じた対応を指示する。（児童生徒の安否確認、施設の破損状況、登校の判断） 	<ul style="list-style-type: none"> ・直ちに配置につく ・避難の指示を放送で流す。 ・情報を収集し、職員に周知する。 ・全職員に業務し、迅速に対応できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・直ちに学校での配置につく。 ・本部長から指示を受けた内容を全職員に周知する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・指示を受けた職員はその業務にあたる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・全職員が直ちに学校での配置につく。 ・指示を受けた業務を行う。

※自らが被災し、家族や家屋が被災するなどの状況では、自らの安全を確保した上で業務にあたる。

あとがき

未曾有の被害をもたらした平成28年熊本地震。本書は、震災に際して熊本かがやきの森支援学校で「何が起き、どう対処したのか」また、「児童生徒、保護者、職員はどのような対応を強いられたのか」などを克明に記録し、課題・問題点を探り出した上で、今後の防災対策に生かすとともに、教訓として後世に残すことを狙いとして作成しました。児童生徒・保護者・職員すべてがこの地震の被災者で、この記録の関係者となりました。その瞬間の状況、行動、生々しい声がこの記録に盛り込まれています。

震災直後から、各職員に記録として残すために写真などを撮るようにとの指示が校長から出されました。混乱し落ち込んでいる時ではあるが、だからこそ今後の記録として撮影した写真が役に立つ日が来るであろうと、校長は考えておられたようです。避難所運営のノウハウ等無い中で、ただ誠心誠意出来る対応をしていく他ない状況ではありましたが、とにかく届いた支援物資の発送元や内容、その時に起こった出来事等をホワイトボードに逐一書き留め、ホワイトボードが一杯になったら、デジタルカメラで撮影して消すということに徹したり、状況毎の写真を撮影したりしていきました。今見返せば、当時の貴重な記録として、たくさんの写真等を残すことができました。

これを詳細な記録として残すために、発災直後から総務部員として骨身を惜しまず食事対応に奔走してくれた、中学部主事西教諭に編集に当たってもらいました。忙しい中、執筆してくれた、関係職員に感謝したいと思います。また、広く保護者からの執筆を募り、たくさんの保護者が寄稿してくださいました。辛く、苦しい体験をされたからこそ、困難な中での工夫や、今後の防災対応に役立つ提案も本書には書かれています。

私たちが初めて経験する大規模災害ではありましたが、避難者同士の助け合いの姿、遠方から駆けつけた炊き出しボランティアの笑顔、救援物資に添えられた応援メッセージ、避難している子どもたちの笑顔等々、たくさんの勇気づけられる場面がありました。発災後10日間は限られたメンバーで避難所運営を行っていたため、心身共に疲弊しきっていた私たちの心を明るく照らし、がんばる勇気を与えてくれました。皆さんを支えていたようで実は私たちの方が支えられていたことに気付かされました。

困難な中での工夫や提案等も本書に盛り込んでいます。教訓として浮かび上がった諸課題への具体的な対応を講じつつ、さらに防災型コミュニティスクールへの取組が確立し、大規模災害発生時における対応を適切に果せるようにしていく使命があると感じています。また、避難所運営時は特別支援学校としての専門性を惜しみなく発揮し、それぞれの職員が使命感を持って、困り感のある避難者に寄り添った行動・対応をした「かがやきスピリッツ」を後世に引き継いでいかなければならないと考えています。

熊本地震から1年。熊本の復興とともに、本書が減災・防災への取組の一助となれば幸いです。

熊本県立熊本かがやきの森支援学校

教頭 富永佐世子

※表紙の題字は、本校弘こずえ教諭が書いたものです。

熊本県立熊本かがやきの森支援学校

(本 校)

〒860-0046 熊本市西区横手5丁目16番28号
電話 096-319-2000 FAX 096-319-2111

(江津湖療育医療センター分教室)

〒862-0947 熊本市東区画図町大字重富575
電話・FAX 096-379-4420

〈ホームページ〉 <http://sh.higo.ed.jp/kagayaki/>
〈メールアドレス〉 kagayaki-s@pref.kumamoto.lg.jp